殺人犯は救世主

薬売り

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

史上最も幼い殺人者として世界から注目を浴びた『鬼島玄龍』――――――――それから１３年、彼は幻想郷へと誘われる……

この物語は、永遠に消えない哀しみの物語だ。

幻想の世界で生きる殺人鬼はなにを思う？なにを感じる？

全てを解く。消えない哀しみさえ……

～ＷＡＲＮＩＮＧ～

この物語は、東方ｐｒｏｊｅｃｔの二次創作です。

不定期更新です。

目次

紅き吸血鬼は血か月か

第一話　『殺人犯は救世主』――1
第二話　『殺人犯は能力者』――12
第三話　『殺人犯は幻想郷の子供が好き』――20
第四話　『殺人犯は冷たい男（物理）』――28
第五話　『殺人犯は優しくない』――34
第六話　『殺人犯はお人好し』――38
第七話　『殺人犯と魔法使い』――45
第八話　『殺人犯と同じだろう』――53
第九話　『殺人犯は吸血鬼？』――62
第十話　『殺人犯は何者で』――67
第十一話　『殺人犯は監視役』――75
第十二話　『殺人犯は臆病で』――79
第十三話　『殺人犯と笑顔と恐怖』――86
第十四話　『殺人犯は人外で』――93
太陽の満ちるその時まで
第十五話？『殺人犯はゾンビじゃない』――99
第十六話　『殺人犯は荷物持ち』――108

第十七話　『殺人犯は再会を』　―　117
第十八話　『殺人犯は傍観者』　―　123
第十九話　『殺人犯は容赦しない』　130

紅き吸血鬼は血か月か

第一話　『殺人犯は救世主』

『お前は悪魔だ』
父の言葉
『お前を産んだ覚えはない』
母の言葉
『怖いわねぇ』
近所の奴等の言葉
『消えろ!!サイコ野郎!!』
まわりのガキの言葉
みんな
殺した

カフェで珈琲を飲み本を読んでいる彼を見て、まわりの人々は大人びた青年と感じるだろう。まぁ、実際にそうなのだが。カフェのバイトは彼を見て「あの人カッコいいね!!」「キツカケ作っちゃおうかな」等と鬱陶しい話をしている。彼自身は本に集中し、無心で読み続けている。ヒラリと頁をめくり、目を動かしている。そこらにいる、何処にでも居るような人間のようだ。

だがそうじゃない

彼は幼児の時に親や近所、幼稚園の同じ組のガキを大量殺人した、狂気的で史上最も幼い殺人者として警察の監視下で今も暮らしている殺人犯なのだ。少年院や児童相談所ではないのだ。その理由は、彼自身の力に起因する。人智を超えた超能力のような何かを、彼は生まれつき持っていた。そんな力を持ちながら、たったの五歳だった少年は、人の血液を飲む性癖を持っていて、今は改善されてきている。

後、二週間で監視下から解放される。その為心踊る気持ちでイッパイなのだ。正確には、ただ住む場所が変わるだけで解放では無いのだが。彼の分からないところから感じはされているはずだ。

「この本、ちっとも面白くないじゃないか。さ、自由時間も終わりが迫っている。帰ろう。」

冷たい声をしている。

買ったばっかりの本をゴミ箱に捨て、そのまま警視庁の方へと歩んでいった。

警視庁が見えてくれば、同時に俺を待っている警察が見えてくる。

「名前、番号を言え。」

「ハァ…分かるだろう？何年一緒にいるんだよ。」

「いや、そうだが……今日を入れて１４回言えばもう解放だぞ？」

「そうかそうか。そうだったな。二週間待てば、もうアンタの汚い顔を見ずに済む。」

「そいつぁ嬉しいだろうな。ポニテ男。」

「それ、罵れてないぞ。」

「罵ってほしいのか？」

「そうだ、と言ったらどうするつもりだったよ。」

「ああ、早く言え!!飯抜きにするぞ!?」

それは困る。俺も生きてるので、食わなきゃ動けない。どうせ、明日も働かされるんだろうから。働くって言うか、実験って言うか……まぁいい。

「『鬼島玄龍』。番号３５８。」

さて、就寝の時間。この時間が今日を含め１４回来ればいい。それだけで、俺は自由。冷たいベッドと薄い毛布に体をサンドさせて、遠足の前日の夜のようにウキウキさせていた。二週間も後の事なのに。

その時、違和感を覚えた。重い瞼を開け、鉄格子の方を見る。違和感は警戒へ変わった。

「ごきげんよう。」

「やぁ、ごきげんよう。こんな真夜中にどうかしたのかい？夜這い？」

格子越しに女性が俺を不気味な笑みを浮かべて話しかける。金髪の長い髪を持つ女性だ。

「してあげても良いわよ？」

「そりゃ嬉しい。どっから来た？」

「切り替えの早いこと。」

「答えろ。」
　少し、殺気を放ったが女性は受け流す。否、受けてすらいない。
「貴方、いい能力を持っているわね。」
「狙いはこれか。」
「間接的には。狙いは貴方自身よ。」
「なにか違いが？」
「ないわ。」
「ああそうかい。」
「ねえ、こっちの世界に来ない？」
　こっち……それはスパイとか暗殺者とか…ｅｔｃ　ｅｔｃ…のことを言っているのか？それは困る。１３年の我慢が無駄になる。
「こっちと言うのは、異世界のことよ。正確には違うけど、便宜上そう言わせていただくわ。」
「精神科へ行くことを勧める。」
「貴方の能力のこともあるわ。別世界だって、あっても不思議じゃないと思わない？」
「いや全く。」
「その世界は『幻想郷』という世界よ。貴方には救世主になってもらうわ。」

いきなり訳のわからんことを……『幻想郷』？『救世主』？アホらしい…聞いてて虫酸が走る。だがしかし、同時に面白そうだ。普通、こんなことを聞いて『面白そう』などと思うバカは居ない。と言うより信じないだろうけど、なんか信じてしまった。

「行くの？行かないの？」

「そりゃあ、勿論。『今は行かない』。」

「は？いや、貴方結構行きたそうな顔をしてたわよ？」

「二週間と一日後、また来てくれ。そしたら、こんな小汚ない部屋じゃないぞ。解放されるんだ。」

「なるほど、そういうこと。良いわ。待ってあげましょう。私の名前は『八雲紫』よ。」

そう言い、彼女は紫は消えていった。暗闇でよく見えなかったが、なんかしらの方法でここを出たらしい。しかし、一瞬で消えてしまったのはどういったトリックなのだろう。彼女も能力があるとかか？

俺は、薄い毛布に顔を埋め、深い深い夢の世界に入っていった。

１４回の夜を越え、この日がきた。
昔から俺の面倒を見た警察と強い握手をした後、足を交互に出した。今日から自由。自由に生きる。そして、二週間前に来たカフェに入店した瞬間。驚愕と言っても過言…いや、そんな驚いてない。過言だった。
「あ、玄龍!!遅いじゃないの!!」
まるで、待ち合わせ中の彼女のような振る舞い。前は、暗くてよく見えなかったが、結構な美人。
「悪い悪い。待たせてしまったな。」
俺もノッてみた。端から見ればよく居るウザったいカップル。内心キツいが、まぁ、どこから見てるか分からない監視を欺くためにはしょうがない。きっと今頃「どこで彼女を作ったんだ?」と喚いているだろう。
俺は、テーブルに座り。向かい合わせ。カフェのバイトは「なんだ、彼女持ちか」と、厨房で諦めた。
「紫…何故俺がここに来るってわかった?」
「勘かしら。そんなことはどうでもいいわ。」
良くないな。

「何故、殺人犯の俺を救世主にしたがる？」
「そうね……私は幻想郷を管理している者よ。その幻想郷に招待するのはある条件を持っている者なの。」
「条件？」
「一つ目、能力持ち。」
　確かに、持っているな。
「二つ目、固定概念があまり無い人。」
　監視下で暮らしてたからそんなに無い。
「忘れられても構わない人。」
　ン？唯一分からないぞ？
「それは…どういう意味だ？」
「幻想郷はね…忘れられた物や者の行き着く場所なの。幻想郷へ行けばこの世界から貴方自身の記録は無くなる。また、この世界に戻ってきても一からやり直し。」
「へぇ。」
　結構残酷だが、そこまで驚かなかった。
「だから確認」
　真剣な目で俺を見つめる。

「嫌なら嫌と言って良いわ。貴方、『幻想郷に行ってみない』？」
「いいよ、別に。」
「え？」
結構あっさり。答えは簡単。
「俺、友達いねぇし。」
「……そ、そう。」
「いんじゃねぇか？結局、俺の自由は保証されるんだろ？」
「ええ、まぁ…」
「じゃあよろしい。」
きっと、粘るつもりだったのだろう。引き付ける言葉を考えて考えた末に選んだ言葉を結局使わないで済んで、ビックリした顔をしている。どんな顔だよ。
「さて、地味に話を反らしやがったが、俺を救世主にしたがる理由は？」
「別に反らした覚えはないわ。貴方には固定概念がないでしょ？」
「まぁ。」
「自分の考えだけを信じるものは破滅へと導く者へとなるのよ。」
「破滅？」
いまいち理解ができない。

「そう、破滅。自分の考え及び固定概念を壊さねば、幻想郷では役立たずもしくは悪よ。」
「どう言うことだ？もっと分かりやすく言え。」
「幻想郷は『非常識』な世界よ。固定概念に非常識をぶっ混んだらなにが起こるかわからないのよ。パニックをおこして役に立たないバカになるか、非常識を壊す悪になるか。」
「ふむ…理解出来たような…出来てないような。」
「十分よ。貴方は『別世界』という単語を聞いたときすんなり信じたもの。固定概念なんてなんにもないわ。」
　あれ？精神科を勧めたような？
　それにしても、やっぱり理由を避けているな。何がある？俺が救世主になることでその世界はどうなる？まず、その世界は救世主を求めているのか？
「まぁ、いい。場所を変えよう。早速幻想郷へ行くとする。そうだな、神社はどうだ？あそこは人気がない。」
「神社って……本当に貴方すごいわね。」
「？」

「さぁ、着いたぞ。」
「そうね。……もう一回聞くけど本当に良いの？」
「しつこいねぇ。良いって言ってんじゃん。」
「そう…じゃあ、目を閉じて。」
「ン、わかった。」
　そうして目を閉じる。
「ようこそ幻想郷へ。」
　その言葉を聞いた瞬間、その場の雰囲気が変わった気がした。面白いじゃあねぇか。
やってやるよ。

第二話　『殺人犯は能力者』

「良いわよ、目を開けて。」
紫に従い、ゆっくりと目を開ける。なんだろう、緊張なのだろうか。心が落ち着かないこの気持ち。
新しい世界。新しい時間。新しい……自分。
「これは…」
感動した。
広がる光景はまるで幻想。蒼く壮大な空。涼しく心地よい風が俺の肌を心地良く撫でる。香る華や眩しい太陽。それらが、あっちの世界を忘れさせた。清々しい程の空気が、自分と言う殺人者としての記憶さえも書き消す。
思った。俺は人間だと。この清い景色に感動する俺も化け物なんかじゃない。そう、思わせてくれた。
「綺麗でしょう、私達の幻想郷は。」
「あぁ、素晴らしいね。」
紫の声を聞いて我に返る。

よく見ればここは神社のようだ。紫がスゴいわねと言っていたのは、きっと俺が選んだ場所と最初に来る場所が一緒だったからだろう。
「神社…か。賽銭でも入れるか。」
「この世界の通貨と両替する？」
「助かる。」
自分の全財産を彼女に渡し、彼女は謎の空間から金を出した。
「それは…？」
「私の能力で創ったスキマよ。慣れてちょうだいね。」
「そ、そうか。」
「これで良いわよ。あとは自由にして。」
「だが…この世界で何を…。」
「賽銭入れたら解るわよ。」
意味不明な事を言い残して去っていった。スキマに入って。
あれ便利だな。羨ましい。二週間前に来た時もあれで移動していたのか。
俺は、言われるまま賽銭箱に銭を入れた。そして、カンッと音をたてた。その刹那だ。
そう、刹那。神社の戸が破壊した。
「金ェェェッ!!」

「元気だね。」
　いや、正確に言えば蹴り破られたと言った方が良いだろう。巫女が神社破壊するってどうなのさ、と思いつつ金に執着する巫女に質問。
「なぁ、いきなりだが、この世界で何をしたら良い？紫に賽銭を入れたら分かるって言うから入れたが…」
「こんなに銭が!!」
　おう、とりあえず話を聞こうぜ。
「あのさ…」
「貴方が入れてくれたのね！賽銭を入れてくれたお礼にお茶を淹れるから入って！」
「いや…あの…」
　話も聞かず奥の方へ行ってしまった。なんだかなぁ……

「つまり、外来人って訳ね。しかもアイツ公認の。」
「まぁ、そう言う事だな。」

やっと話を聞いてくれた。彼女はこの『博麗神社』の巫女さんの『博麗霊夢』という名前らしい。見るに、信仰がなくお金に困っているようだ。

どうやら幻想郷と言うのは、『人間』は勿論、『妖怪』や『幽霊』、『妖精』や『月の民』と言う謎の種族が住まう場所。忘れられた者の世界らしい。住人全員ではないが、俺と同じ能力者も居ると聞いた。霊夢もその内の一人。これは面白い。ついでに、彼女の言う『外来人』は、あっちの世界から来る人間らしい。

「んで、どんな能力さ。貴方は。」

「どんな、か……」

「…？」

説明がしづらい。今まで警察の人から習ってきた日本語の言葉を選んで、並べて、揃えてみた。

これが一番良いだろう。

「俺の能力は……『解く程度の能力』とでも言っておこう。」

「解く程度の能力ゥ？」

「ま、そうだろうよ。理解できるわけがない。」

『解く』と言われても「何を？」と言われるのが普通。

「そうだな、例えるなら……重力。」

「うん。」
「重力が俺らを地に立たせてくれてるだろう？それを『解く』と、無重力になるんだ。」
「……？」
「視力を解けば失明する。」
「つまり…物理的なものを解く？」
「それもある。」
　頭の回転が良いようで。別に、スタンドを使っている訳じゃあないぞ。サイコキネシスっていうのか？生まれつきそういうのが出来た。皆もこれで殺した。
「へぇ…強いじゃない。紫が招待した理由が分かったわ。」
「なぁ、紫は俺の事を『救世主』なんて馬鹿げた事を言っていたんだ。それは…？」
「何も教えてないのね、あいつ。」
「何も教わってないね、オレは。」
　実際には教えてもらったが、意味不明なので霊夢に教えてもらうことにした。
「ここでは、『異変』って言うものが起こるの。」
「異変？」
「そう、妖怪や幽霊、妖精等々…が起こす異変よ。」
「うわぁ…大変そうだな。」

きっと強い妖怪も居るだろうし、面倒そうだ。
「その大変そうなのを解決するのが私なの。」
「へぇ…」
「代々、博麗の巫女は異変の解決を行うことになっているの。」
「妖怪を殺すわけか。」
思わずニヤリと笑う。紫は、俺を殺人犯と知っていて幻想郷に招いたな?能力を知っているんだ、そうに違いない。
そんなことを考えていたが、霊夢の言葉で消え失せた。
「物騒ね?殺人犯だったのかしら?」
「え。」
一瞬ドキッっとした。勘が良い子だ。取り合えず、得意の嘘を言っておこう。
「んなわけねえだろう?」
「私から見て目が左に向いてる。」
「へ?」
「人は嘘をつくとき右脳を使うの。私から見て目が左に寄ったら嘘。逆に右は真実。」
頭の良い子だ。すぐ嘘がバレた。
「ま、どうでも良いわ。」

「良いんだ…」
「それより解決の仕方だけど『スペルカードルール』で解決よ。」
「それは？」
スペルカード？ゲームかなにかかな？この世界はゲームで物事を解決するのか。
「これを見て。」
そう言って、霊夢は手を前に出した。不思議に思いながらも、言われた通りに見た。
すると…
「これは…!?」
「弾幕よ。」
弾幕と言われた物。それは光輝き、まるで太陽のように眩しい球型のなにか。
「これを使って、相手に当てるのよ。触ってみる？」
「あぁ…」
当てる？ドッチボールかなにかか？それなら得意だぜ。警察のやつらと年に一度だがドッチボールをやった。その時についたアダ名は「回避王」だ。
俺はそろりとその球を触った。すると…
「イッタァァッ!?」
激痛が走った。身体中を駆け巡る。まるで血液のように、いや、それより早い。一秒

に身体を三周はしている。
「こう言うことよ。」
「なるほど…それはそれは……オレに不向きなものだな。」
「あらそう、なら帰る？」
「世界が俺を忘れた。戸籍がねぇからロクに生きられねぇよ。」
「じゃあ頑張るのね、殺人鬼さん。」
腹立つな。ま、どうでもいいや。そう思いながら霊夢は入れた茶を飲んだ。ぬるい。

第三話　『殺人犯は幻想郷の子供が好き』

あれから、数日経った。住む場所が無いため人里で家を買い、呑気に過ごしていた。平和すぎて暇だと思って、筋トレをしていたら初めて『異変』が起きた。

「これは……異変だよな？」

空一面、紅い雲に覆われ、ほぼ毎日俺を照らしてくれていた太陽は消えていた。

返せ。寒いじゃねぇか。暖かい太陽を返せ。

「ハァ……博麗神社に行くか。」

太陽を取り戻すため、せっせと足を運ばせた。暫くすると神社が見え、巫女が見えた。

「おはよー。生憎の天気ね。」

「そうだな」

呑気に座りながら、空を眺める霊夢はため息をついていた。

「さぁ、異変解決にでも行こうか。」

「待って、まだよ。」

「え、だが……何故？」

「呼んでもない奴がもう一人来る。」

そういった瞬間、ドンガラガッシャンと何かが神社に突っ込んできた。霊夢は手を顔にあて、やれやれと疲れはてた顔をした。
「おーい霊夢!!異変だぜ。早く行こう。」
「修理してよね。」
「いつかな。」
魔女のような格好をしていて、金髪の若い女性がいた。服をパンパンとはらい、ニッコリと登場してきた。
「こいつは?」
「殺人鬼。」
「珍しい名前だな。」
「違う。オレの名前は鬼島玄龍だ。」
「『霧雨魔理沙』だ!!宜しく!」
と、これまたニッコリと挨拶。霊夢と違い、フレンドリーな彼女。霊夢の言葉から察するに、彼女も異変解決をする人なんだろう。
「じゃあ行きましょう。」
「え、こいつもか?」
「こいつもよ。」

「ふーん。ま、いいや。」
そう言って、彼女は箒をまたぎ、中に浮いた。なるほど、本物の魔女か。
「行きましょう。」
「あーすまない。ある事情により、飛べない。」
「え？」
「先に行っててくれ。」
「あら、そう？首謀者は多分アッチにいると思うから。先に行ってるわよ。」
霊夢が西を指し、そのまま飛んでいった。あっという間に彼女らは豆粒ほどの大きさになり、見えなくなった。
「じゃあ、行くか。」
一人寂しく歩くことにした。

いつの間にかまわりは森になっていた。
この森に入って二十分。気持ち悪くなってきた。吐きそう。この森に何かヤバイ粒

子でもあるのだろうか？

「ハァ……ハァ……早く帰りたい。」

「お兄さん、どうしたの？」

「えぁ？」

知らぬ間に、女の子が後ろに立っていた。青鬼だったら頭を喰われて死んでただろう。青鬼じゃなかったことを感謝しつつ、質問。

「この先に行きたいんだけど、あとどれくらいでこの森をぬけられる？」

「そーだなー……二、三分じゃない？」

あと少しだ!!喜びを覚えた。森を抜けた暁には何をしよう。あ、そういや異変解決中だった。目的を間違え、恥ずかしい。

「でも、貴方は永遠ここから出られないわ。」

「え？」

「だって、『私に食べられる』のだもの。」

私に食べられる？どういう意味だ。性的な意味だったら断るが…ここから出られないと言うことを言っている。つまり、俺をランチとして食う訳か。

「こんな天気の日に死ぬなんて嫌かもだけど、私のために死んでちょーだい。」

「えぇーやだ～。いや、俺も人を殺してその血液をがぶ飲みしたことはあるから、ヤダと

か言う権利無いかもだけどヤダー。」
「結構クレイジーね。」
　よく言われるよ。さて、普通に嫌なので抵抗をさせていただこう。その前に…
「俺は鬼島玄龍。君、名前は？」
「ルーミアよ。」
「んで、どう殺す？この俺を。」
「暗闇にする。」
「暗闇？」
　瞬間、まわりが闇に包まれた!!こいつも能力者か……
「え、この程度の闇でもう見えないの？鳥目なの？」
「暗いところは好きさ。」
「うれしーわねー。」
　棒読みでパンチをされた。音のする方に耳を傾ける。更に闇が深まった。
「じゃあ、夜も好き？」
「大好きだね。」
　音のした方に顔を向けたらその顔を殴られた。更に闇が深まった。
「冬は夜が長いから好きだよ。」

「あー!!私もー!!」
おかしい。『スペルカードルール』は?これは一方的な戦い。ルールなんてない。どう言うことなんだ?そう言えば、能力者は幻想郷の住民全員ではないらしい。これが原因か?ごく一般の人間は弾幕なんて出せないから、妖怪はそれを狙っている?
なるほど。一人で納得した。更に闇が深まった。
「さあ、お話もおしまい。貴方を食べるわ。」
「なあ、闇が好きなんだよな?」
「好きよ?」
「そうかそうか。なら、『完全な闇を君にあげよう』。嬉しいだろう?」
「え?」
「闇を『解く』。」
辺りの闇は消えた。そのひとつの言葉だけで、俺とルーミアが大好きな闇が消えたのだ。アッサリと消えたその闇。だんだん濃くなっていくのに消えるときは一瞬。まるで、「今流行りの人気芸能人」と言われたにも関わらず、半年でＴＶから消える芸能人みたいに。アッサリと消えた。
「なんで!?」
「さて……」

右を見たり左を見たりして焦るルーミアの頭に手を置いて、囁きかけた。
「君の視力を『解く』。」
「え!?」
ルーミアの視界には何も写っていない。見えるのは闇。
「どこなの？お兄さん…」
「……」
暫く無言で眺めてようか。さていつまで続けよう。俺は木に凭れその光景を眺める。
そこら辺の木にぶつかり、必死になりながらも俺を探している。暫くして、俺のところまで辿り着いた。
「…見つけた。」
ルーミアは俺を殴ろうと右手を振り上げる。
「解け。私の視界を返せ。」
「よしよし、すまないな。能力を『解く』。」
ばーか。それが狙いだよ。
「うっ…ぐああ!!眩しい！」
ルーミアは目を抑えながら地面で転げ回る。
「ずっと光がなかったんだ。いきなり光を得たらそうなるだろ。まぁ、それだけじゃな

いけど…」
「ぐっ……」
よく考えてみればひどいことをしている気がする。まぁ、生きるためだと言い訳をしておこう。
「さて、それそろ行かなくっちゃあな。」
「待て…逃げるなぁ…」
「異変解決しないといけないんでな。それじゃあな。」
そういって、手をふりながら森を抜けた。結局、森を抜けても気持ち悪かったので吐いてしまった。

第四話　『殺人犯は冷たい男（物理）』

吐き気が無くなったので、そのまま異変解決に行くことにした。
気付けば、大きな湖がある。辺りは異常に寒く、身を震わせながら移動していた。
「アガガガガ…寒いなぁ…」
まるで壊れたロボットのように震えて、歯をガチガチならしている。暖をとりたい。
「いくらなんでも寒すぎねぇか？まるで冬だ。」
「そうかなぁ？」
またこのパターン。本日二回目。
後ろに女の子が立っていた。幻想郷では人の後ろから話しかけるのが礼儀なのか？
「ごきげんよう。寒くないのか？」
「うん、全く。人間は弱いわねぇ。」
「つまり君は妖怪？」
「最強の妖精」
『最強の要請』？なんか強そう（小並感）。え？違う？なるほど、『最強の妖精』か。
これは失礼。

「んで、その最強の妖精サマが俺に何の用さ？」
「え～と…ン？なんだっけ。」
「覚えてろよ。たまにそういうのあるけどさ。」
「あ、そうそう。戦いたいから戦って。」
「なんじゃそりゃ」
　戦闘狂かよ。治安が悪いな、幻想郷。こんな子供が戦闘狂なんて。
「鬼島玄龍だ。君の名前は？」
「『チルノ』だ。」
「…苗字は？」
「え？」
「え？」
　苗字を聞いて「え？」って答えられたのは初めての経験。
「ま、まぁ…いいや。すまないが今、忙しいんだ。今度にしてくれないか？」
「フン、怖じ気づいたのね。」
「う～ん…ま、それでいいや。今度でいいかい？」
「ふむふむ…そうねぇ。人間にも事情ってものがあるし、また今度って言うことだからねぇ…」

お、交渉成功の予感。
「じゃあ、そう言うことで…」
「だが断る。」
おいこら、どこの漫画家だよお前。衝撃的すぎるぞ。
瞬間、足元に氷柱が刺さった。いつの間にか、チルノは空中に居た。
「Oh…」
「人間って言うのはねぇ…すぐ嘘をつく生物なの。信じないよーだ。」
子供らしく挑発。それは置いといて、氷柱なんて何処にもなかったはず。足元の氷柱は何だ？
だが、これで攻撃したのは確かだ。辺りが寒いのはこいつのせいか？
「そいつぁ残念だ。殺さない程度に終わらせるからな。」
「甘い甘い。あんこに蜂蜜と砂糖と生クリームがかかった物ぐらい甘いね。」
「うわ、クドッ!!クドイッ!!」
「殺す気であんたと戦うわ。」
そう言い放った。そしたら、徐々に氷の塊がチルノの近くの空気中にできてくる。
氷柱状になった氷は俺の方へと向かってくる。
「おっとっと。」

美味しいよね。

さて、どうしたものか。推測だがあいつは、氷の妖精だ。ならば、あれを『解く』か…。

俺はあれを『解いた』瞬間、後ろに退いた。丁度氷柱も来たしね。

「避けるだけ？面白くないわねぇ。」

「降りてこいよ。飛べない俺にとって不利だろ。最強なんだろ？ハンデぐらい欲しい。」

さぁ、あからさまな誘導だが、引っ掛かってくれるだろうか。

「はぁ？」

流石にダメか。こんなので引っ掛かるバカは居るわけ……

「仕方がないわねぇ……」

居たよ……このバカチンがぁ!!3年B組は置いといて、引っ掛かったので実行しようと思う。

「ありがとう。」

「まぁ、弱者に優しくするのが強者の勤めよ。」

「そっか。」

「にしても急に涼しくなったわねぇ……なにかした？」

警戒するチルノ。そこまでバカじゃないか。

「俺の能力さ。空気中の分子の振動を『解いた』んだ。」
「……ン？」
「それによって、温度が極限まで下がった訳さ。君は氷の妖精だろう？だから、涼しいってだけで済むけど、俺達人間は死ぬね。」
「へ、へぇ～。」
　知ったかぶりで分かったような素振りをするチルノがなんとなく面白い。
「その状態を解除したら、『解いている』間の反動が出てくるわけさ。」
「？」
「今、能力を解いたら初夏ぐらいの気温になる。」
「ッ!?」
　急いでその場から離れようとする。だが…
「もう遅いッ!!能力を『解く』ッ!!」
　その瞬間、熱エネルギーが発生したッ!!俺は普通に耐えれる温度だが、チルノは……
「ううッ!!」
　一気に汗が出てきて、今にも脱水症状が起きそうな、否、もう起きている。
　次第に温度は平温になったが、チルノはそこに倒れている。
「ハァ……ハァ……」

「う～む、また罪悪感。」

生きるためとはいえ、やり過ぎた。勝ち方もセコいなとも思った。自分がやった事なので、責任は俺にある。

何処か近くに建物はないだろうか。そこまで運ぼう。

「おや？あそこに紅い館があるなぁ。入れてもらおう。」

湖の向こう側にある館に向かうことにした。チルノをおんぶして、猛ダッシュで運んだ。

第五話　『殺人犯は優しくない』

紅い館が近くに見えてきた。

チルノはまだ荒々しく息をしている。取り合えず安心。まだ生きている。いや、安心しちゃあならない。館に人が居るかどうかが不安だ。

そんな心配は門の前に来て失せた。

「イテテテテ……」

門番がいる。つまり、人が住んでいる。門番を雇っているのを見れば、お金持ちということが分かる。この子の治療は十分にしてくれるだろう。ここの主がケチじゃなければの話だが。

「スミマセン!!そこの門番さん!!」

「ン?どうかしまし…うわ!?この子、氷の妖精さんじゃあないですか!!」

「脱水症状で危険な状態なんです!!中に入れてくれませんか!?」

「い、いや…その…何て言うか…」

と、歯切れの悪くなる門番。

「この子、もうすぐ死んでしまう!!」

「入れたいのはやまやまなのですが…入れられません。」
「え、入れられない？」
　入れられないと言うのだ。ここの主がケチ野郎なのだろうか？そう思っていたら、こんな答えが返ってきた。
「妖精って言う生命は、自然が有る限り死にません。一度死んでもまた何処かで復活をするのです。」
　無償に腹が立った。彼女は、入れないと言った。妖精だから。妖精だから？
「ふざけんなよ？」
「え？」
「なんだ？妖精は死なないから治療しなくて良いってか？お前は身近な人が今苦しんでても、後で治るだろって言って心配すらしないのか？」
「ッ!?」
「見ろよ。苦しい顔をよ。この原因を作ったのは俺だ。だから、責任を持って休ませてくれる家を探していた。勿論、巻き込むわけだから断られても仕方がないとも思った。」
「……」
「だが、その断る理由が『妖精は死なないから休ませなくて良い』だと？ふざけるのも大概にしろよ。」

あれ？なんで俺は怒っているんだ？人を殺したことのある人間が、このことで怒って良いのか？怒る権利は有るのか？無いんじゃあないか？

俺は、自ら行っている行動が分からない。

「……スミマセンでした。その子を妖精メイドに寝室まで運ばせます。」

そういって、指をならすとその妖精メイドらしきメイドが何人か来た。

「この子を寝室へ運んで。」

「え…ですが…」

「良いからッ!!」

「は、はいィィ!!」

エッサホイサと運んで行くのを見届けた門番さんはこちらを見て、深く礼をした。

「スミマセンでした。人間として……ではなく、妖怪としての優しさを忘れていました。」

あ、妖怪なんだ。

「私の名前は『紅美鈴』と言います。」

「あ、鬼島玄龍です。」

「玄龍さん。スミマセンでした。」

「い、いや、気にすることはないですよ。俺も感情的になりすぎました。」

根は優しい人で良かった。と、しみじみ思う俺。前に警察の人に喧嘩売ってフルボッコにされたトラウマがあるから…良かった。
「そう言えば、ここでどうなさったんですか。」
文字だけを見ると、ただの疑問を投げ掛けているように見える。実際に話していてもそう思える。だが、目が警戒の眼差し。
要するに、異変中なのに人が出歩くのは可笑しいだろ?と言う意味。更に、警戒の眼差しと言うことは……
「彼女らと同じく異変解決中ですよ。」
「やはりそうでしたか……」
ここの主が異変の黒幕だ。
思い出せば、美鈴さんは俺が運んでくるときに「イテテテテ」と、傷だらけで座っていた。きっと、霊夢たちに付けられた傷だろう。
「貴方だけでも、ここへは入れないッ!!」
「いいや、入れてもらうよ。必ずね。」
そう言い、互いに構えた。

第六話　『殺人犯はお人好し』

館の中で爆発音が聞こえる。きっと、霊夢や魔理沙が館の主と戦っているのだろう。その館の外には二人、構えながら睨み合う者達。

先に動いたのは美鈴だ。

「ハッ!!」

手始めなのだろうか。シンプルに右手を高速で出してきた。

護衛術は警察官に教えてもらった。だが、所詮護衛術。攻撃する手段は能力しかない。

「逃げるだけですか。あまり戦闘の経験がないようで。」

「まぁな。なんせ、監視されてたからよ。」

「監視？」

「ウラァ!!」

ヘタクソなジャブ。当然、簡単に避けられ、カウンターをもらう。しかも強烈な。

「うッ!?」

「……あ、す、すみません!!ここでは弾幕で勝負をするのがルールだったん…」

「いらねぇ。」
「え？」
彼女は肉体戦に慣れているらしい。癖で殴ってしまった。そんな感じだろう。肉体戦で自分が有利なのに気付いたか、情けをかけてきた。
だが、いらない。俺は口内の血を吐き出し、美鈴が気になっているであろう俺の言葉を続けた。
「…俺は、不向きだ。その弾幕ってのがよ。」
「ですが、これじゃあ妖怪である私が有利ですよ。」
「弾幕ってのがいまいちまだ理解してねぇし、やったこともない。だったら、慣れた方をやるのがマシだろう？」
とは言え、肉弾戦はあまりしたことない。というか、さっきのカウンターで既にボロボロの弱い人間が、どっちにしろ勝てっこない。なら、当たって砕けろ。まだ理解している方をやる。
「オラァ!!」
「フッ!!」
さっきと同じようなパンチを繰り出した。だが、美鈴はさっきと違う避け方をして俺にカウンターを食らわせようとしている。同じ避け方ではいつか逆にカウンターを食

らうからだろう。
　そんなことを予知していた俺は、美鈴が最初にカウンターをした方向へと避けた。何故？今さっき説明をしたろ？同じ避け方では逆にカウンターをくらう。そのことを考えたら、唯一カウンターをしてこないであろう方向は見えてくる。最初にカウンターをされた方向だ。
「…成る程ッ!!」
　美鈴は俺が口でわざわざ説明したわけでもないのに、すんなり理解。流石と言えるだろう。だが、どうしたものか。理解されてしまってはカウンターは与えられない。
　そうだ。
「ハァッ!!」
「フッ!!」
　思い切り下からアッパーをしたが、当たり前のガードを披露させられた。想定内だ。
「重力を『解く』。」
「ッ!?」
　美鈴はッ!!上空へ飛んでいったッ!!
「大気圏まで飛んでいけッ!!」
　かなり上空へ行き、このまま勝ちたいなぁと思っていたが…

「考え方はいいですね。」
案の定、空を飛べた。その為、普通に降りて来た。なんか悔しいな。
「貴方にそんな能力があったとは…さっきの弾幕に慣れないと言う話から察するに、外から来た人でしょう?それで、こんなにも強い能力を持った人がいるとは、驚きです。」
「だろ?」
次の瞬間、蹴りが入ってきた。
予想外のタイミングで攻撃されたため、防ぎきれずまともに食らう。壁にキャッチされ、ズルズルと下がっていき、座り込む。俯いて、流れる血を眺めている。
そろそろヤバイ。まだ門番だ。終わるわけにはいかない。
「初心者にしては、いい戦いでしたよ。」
「……」
「貴方は強い。修行をしたら強くなれる。だから、生かしておきます。」
「……」
「私よりも強くなれば…」
「俺は弱い。」
「え?」
確信した。俺は弱い。そして……勝った。

「あんたより、もっともっと弱い。もうほんと、ビックリするぐらい弱い。」
「え、いや、玄龍さん？」
「だが、弱者は必ず強者に敗けると言うのは違う。」
「ええっと…」
「今回が、良い例だろう。」
「え…？」
　目を瞑り、笑いながら、血を流す。
「弱者（オレ）の勝ちだ。」
「なにを…」
「能力を『解く』ッ!!」
「なッ!?」
　美鈴が、いきなり倒れた。上から押し潰される感覚。同時に下に引っ張られる感覚。重力を一気に感じた。
「いっ……たい…なに……を…」
「俺の能力は『解く程度の能力』だ。あらゆるものを『解く』んだ。」
　吐血する美鈴。だが、無視して説明を続ける。
「さっき、あんたの重力を『解いた』。あの時から今までずっとな。『解いていた』間の反

動があんたを襲う。もっと間を空ければ、もっと強い反動を食らう。」
「ハァ……ハァ……」
「安心しな。時期にいつも通りになる。」
「ハァ……ハァ……ハァァァ……」
どうやら、もう反動はないようだ。だが、十分のダメージを負ったようだ。
「完敗…ですかね……『弱者が強者を伐つ』か……」
「フゥーッ…良い名言だろ。」
「よく聞く言葉ですね。」
「うっせ」
急に静かになり、紅い雲に覆われた空を見る。
「なんか、久しぶりに楽しさと言うものを味わったよ。」
「光栄です。」
「さっきから思ってんだが、その敬語止めてくれ。戦友ってヤツあるだろ?なんかカッコいいからなろうぜ。センユーだセンユー。」
「……フフ、適当ね。なんか。」
我ながらそう思う。
「そう言えば、貴方いつの間にか敬語じゃあないものね。」

「やっと気付いた？」
「ええ。」
「気付くの遅いねぇ。」
「うっせ。」
　青春のように笑い合う。久しぶり？初めてか？どっちでも良いや。青春ってのは中々ない。そんな相手も居なかったしな。
　俺は立ち上がり、手を差し伸べる。
「立てるか？」
「お人好しね。敵に手を差し伸べるなんて。」
「敵じゃあない。」
「『戦友』、でしょ？」
「分かってるじゃあねぇか。」
　美鈴が手を掴み、そのまま立ち上がる。
「うわーやられたー（棒）館の中に入られるー（棒）」
「……」
「なんか言えよッ!?」
　ノーコメントで館の中に入ってやった。

第七話　『殺人犯と魔法使い』

努力と言うのは哀しいモノだ。

『塵も積もれば山となる』との言葉。塵という努力を積んで、山という結果が出る。だが才能のあるやつらはいきなり山を出してくる。そんなやつ極僅かの存在だが、いや、だからこそ憧れた。

私も才能が欲しい

勿論、無理だ。だから、気付かれないように努力した。

人の前で『努力した結果』を出せば努力家と言われるが、いきなり『結果』を出せば才能持つ者とされるはず。そう思い、努力した。でもダメだった。あいつらに届かない。

才能を持つ者を追い掛けようと手を伸べるが、あいつらは結果に辿り着くスピードが違う。

どうせ私は、所詮……

努力家だ

光るレーザーが顔の横を過ぎる。危なかった。もう少しで被弾するところだった。
「すばしっこいわね…！」
「だろう？人間も捨てたもんじゃあないぜ？」
「どうかしらッ!!」
紅魔館の図書館。私はそこに住む魔女『パチュリー・ノーレッジ』と戦っている。本物の魔法使い。私のような中途半端じゃない。
勝たなければ。そしたら、私は才能のある者だ。
「もうそろそろ危ないんじゃあないか？敗けを認めりゃなにもしないぜ。」
「余計なお世話よ!!」
咳き込むパチュリーに追い討ちをかけるように弾幕を撃つ。案の定、パチュリーは被弾して、なかなかのピンチだろう。勝ったも当然、なんて余所見をしていたらフラグ立てて負けになるだろうから、そんなことはしない。
「おーい、弾幕が弱まってきてるぞ？」

「そんなことないわッ!!」
いや、明らかに弾幕が弱くなっている。効いてる、私の力が!!これで決めるか……
私はミニ八卦炉を出し、アレをする。
「恋符『マスタースパーク』ッ!!」
「え、ちょ…」
魔理沙の放った大きなレーザーがパチュリーを覆う。ふぅ…と一息つき、まだ戦闘可能な状態かを確認するべく、登りゆく煙が薄まるのを待つ。
人影。どうやら、まだ戦えるような状態だ。
「おっと!!」
「クッ!!」
いきなり出てきた弾幕を避け定位置に戻る。
「卑怯じゃあないか。いきなり弾幕を撃つなんて。」
「貴方のスペルカードの方が卑怯よ!!ツゴホ!!ゴホ!!」
「よせよ、照れるぜ。」
「……いいわ、人間相手だから手加減をしてたけど本気を出すわ。この際喘息とか気にしないわ!!」
喘息なのか。にしても、脅しだろうか?本気だろうか?本気、かなぁ?ま、このまま

いけば勝てそうだし、大丈夫だ。っと、余所見は禁止だな。
「火水木金土符『賢者の石』!!やった最後まで言えた!!」
　いや、最後まで言えるだろう。って言うかすごい名前だな。長い長い。感覚的にＥｘｔｒａっぽい名前だな。
　喜ぶパチュリーは、ハッ!!っと我にかえる。
「食らいなさい!!」
「やなこった……えぇ…」
　思わずドン引き、あり得ない弾幕の数。更に、種類の異なった弾幕が流れてくる。上手く避けれず、被弾しそうになる。
　久しぶりに辛いのが来た。
「うッ!!あっぶねぇ!!」
「ク～～当たりなさい!!」
　まるで競馬で「前の馬を抜けッ!!」と、叫んでるオッサンみたく見てるだけのパチュリー。
　今のところ避けているが、微かに触れているとかバランスを崩しそうだとかの連続。
「うくッ…ボムが少ねぇ……」　※『ボム』とはスペルカードのこと
「当たれ～……」

そしてついに……

「うわぁッ!?」

バランスを崩したッ!!そして、運悪くそこに弾幕が攻め混んでくるッ!!パチュリーは勝ったも同然と既に喜んでいる。魔理沙は、思わず目をつぶる。

終わった……絶望感が襲う。結局、努力家止まりか……

「あぶねぇあぶねぇ」

急な浮遊感。そして、どっかで聞いた声。

目を開けると、口を大きく開けて驚いているパチュリーと……奇妙に笑い、私と私の箒を抱っこしている玄龍が居た。

「いやいや、すごい弾幕だな!!」

「あ、貴方なにしてんのよ!?」

「人助け」

「ハア!?」

明らかに怒っている。折角並べていたドミノを倒されたかのように、やっと倒しそうになった魔理沙を助けやがったのだから、当たり前と言えば当たり前。

「にしても、ここの図書館広いねぇ。俺の好きな本とかありそうだな。」

「え、そうかしら?まぁ、伊達に私が管理してる図書館じゃないからね。じゃなかった

……折角倒せそうだったのに!!」
「日本書紀とかある?」
「レプリカならって、おい!?」
　なにやってんのコイツら。
「いや、すまんね。なんとなく助けちゃった。」
「許さない。」
「なぁ、魔理沙」
「どうした人助け」
　パチュリーを無視して私に話しかける。
「今度さ、スペルカードルールっての?やり方教えてくれない?」
「え?このタイミング?」
「いやさ、お前の弾幕の避け方とかさ、才能の固まりに見えるしさ。」
「……なに言って…」
「だから師匠になってくれないかなぁっとか思ったりして。」
　才能ね……負けかけた私を見たはずだろう?そんなもんない。お前が居たから被弾しないで済んだが、結果的には負け同然。
「イヤだね」

「そっか、じゃあ明日から宜しく。」
「おい!?」
「まさか、今ので負け同然だから師匠になんてなれっこないと思ってる?」
……こいつは一体何だ?私の心の隅から隅まで見透されている感じは、なんなんだ。
「……その通りだろ。」
「だが、当たってない。」
「結果論だ。」
「良いじゃあないか結果論。ほら、まだ弾幕は終わってない。空気読んでじっとしているアイツの身にもなってみろ。」
「そういうこと言うなよッ!?」
……なんだかバカバカしくなってきた。だが、悪くない。良いぜ。
「やってやるさ!!Ｃｏｍｅ＊ｏｎ…パチュリー・ノーレッジさんよ。」
「あの男嫌いだわぁ……」

結果から言おう。勝ったぜ。パチュリーの喘息が再発してね。なんか、勝った気がしないぜ……

「今年で一番最悪な日よ……」

「やったぜ。」

「お前普通に嫌な奴だよな。」

「フッ、よせよ…」

とは言え、勝ったことは勝った。才能がある証明にはならなかったが……ま、良いだろう。

「さ、霊夢のところに行こうぜ。」

「わかった。えっと、パチュリー。」

「なによ。」

「また来るからな。」

「来るな!!ゴホッゴホッ!!」

なんとも変わり者の男。だが、悪いやつじゃなさそうで何よりだ。

第八話　『殺人犯と同じだろう』

「ハァ……ハァ……」
「あんた、すごい芸を持ってるのね。マジシャンかなんか？」
「ハァ…ウッ!!……ウゥ…」
私は今、負けそうです。目の前にいる巫女が恐ろしく強い。
申し遅れました。私はこの紅魔館のメイド長を勤めております。『十六夜咲夜』という者です。能力は『時を操る程度の能力』です。以後、お見知りおきを。
さて、こんな冷静に自己紹介する暇は本当はなく、勝つ方法を脳が焼けるぐらい考えなければならない。
尤も、本当に焼けてしまっては勝つもなにもないですが……
「そろそろ魔理沙や玄龍も来るかしらねぇ。」
「クッ!!」
私は背中に隠し持っていた懐中時計で時を止め、その場からできるだけ離れ、身を隠す。
そして時は動き出す。

「なぁ。」
「ん？」
パチュリーとの対戦で清々しい顔をしている魔理沙と、逆に何故か不思議そうにそして何か嫌そうに顔をしかめっ面にする玄龍が、長い廊下を歩いていた。
「さっきからどうした？眉間にシワなんか寄せやがって。」
「と言うことは、俺だけか。」
「え？」
「いや、こっちの話だ。気にするな。」
気にするな、という要望は聞くはずもなく質問を続ける。
「いや、無理無理。気にするなって言われて気にしないのは無理だぜ？」
「まぁ、確かにそうだが気にするな。」
「えぇ……」
強引だな。そろそろだろうか。霊夢の霊圧を感じてきた。

私が、霊夢は誰と戦っているのかを気になり始めたら、次は玄龍が質問をしてきた。
「なぁ、魔理沙。」
「なんだ？恋人になりたいとかは勘弁だぜ？」
「いや、別に興味ないけど。」
「殴るぜ？」
「……すまん。それで…聞きたいんだが、時が止まったらなにがしたい？」
「……はぁ？」
アホな質問をしてきた。とは言え、質問されたからには答えよう。
「イタズラをしまくるぜ。」
「なるほど……」
「お前は？人でも殺す？」
冗談に言った言葉。苦笑いするコイツの顔が思い浮かんだが、相反して奇妙な笑みを魅せた。
「よく分かったな？」
「え……」
次の瞬間。玄龍はその場に居なかった。何事もなかったかのように、そこに誰も居なかったかのように……

「チッ……痛いわねぇ……ナイフか…」
まだ……死なないのか。
ナイフを投げても投げても彼女には、かする程度だ。時が動き出した瞬間に、彼女は攻撃を避ける。
何者なのだろう。こんな苦戦をしているのは初めてと言って良いだろう。
だが、もう終わらせましょう…
「もう、終わらせます。」
「……」
懐中時計を取り出し、時を止める。
モノクロの世界。そこに動くメイドは巫女に向かい無数のナイフを投げる。
これで死ぬだろう。この数は、避けようがない。
そして……
「そして時は動きだ……」

「オッラァッ!!」
「なッ!?ぐふッ!!」
唐突な蹴り。予想もできるわけもない。何故なら、時は止まっているのだから。私以外、動けるはずもないのに。この男は動いている。
蹴りにより、私は壁にぶち当たる。
「う、動けェェェェェッ!!」
訳がわからないが、時を動かせば彼女は死ぬはず。取り合えず時を動かせばならない。
それなのに……
「う、動きなさいよ!!動けって!!」
「今、時は俺の支配下だ。」
「ッ!?」
男は霊夢を移動させ、呟いた。
「能力を『解く』」
その瞬間。時が動いた。世界に色が付き、スピードを持ち始める世界に私は驚いた。
「え?なんでアンタ倒れて……あ、玄龍じゃん。」
「よっ!!さっきぶり。」

玄龍と呼ばれた男。さっきまで霊夢が立っていた場所を指差し、沢山のナイフが刺さっている壁を見た霊夢の驚いた反応を見て笑っている。

何者なのだ。この人達は…恐怖を感じさせる。

「さぁて、メイドさん。Ｓｈａｌｌ　ｗｅ　ｄａｎｃｅ?時間を『解く』。」

「なに……それ……」

「貴方がしていたことですよ。」

また、世界は色みをなくし、速さを失う。この男は何者なのだろう。

「ウラァ!!」

「ハッ!!」

パンチを繰り出してきた男にガードで受け入れる。今の攻撃の仕方で分かった、彼は戦闘能力自体は低いと。

「私のナイフで、死を体験しなさい。」

「気分が向いたら今度体験してやるよ。」

ナイフの避け方も、まるで一般人。辛うじて刺さっていない感じだ。運のいいやつ。

大口叩いて結局はこれ。多分、たまたま幻想入りしてきた、異変への野次馬か、俺なら解決できると勘違いした奴か。確かに、能力はきっとスゴいものなのでしょう。ただ、技術が無さすぎる。

技術がなければ、勝算は無いに等しいはずでしょう。
そして……
「う、うわぁぁぁぁぁッ!?」
「五月蝿いわね……」
右手が刺さった。たったそれだけ。たったそれだけで大声を叫ぶ。滑稽とでも言っておこう。
しかし、なにか引っ掛かる。
「どうしてくれんだ……」
「…え?」
そして気付く。出血がない。
「能力を『解く』ッ!!」
「えッ!?」
驚くべきことが起きた。高速に移動する玄龍がそこにいた。追い付けないほどに速い。ラッシュを繰り広げてきた。
「ウラァァァァアアッ!!」
「ウグゥ!?」
人間が出せる速さじゃあない。徐々に速さがなくなってゆき、一言だけ…私に言い

放った。
「義手を直すのに時間かかんだぞッ!?」
「……」
「……」
　ええええ……?
　この人、頭がおかしい。視界が薄れる中、私は思った。
「マジ許さん。」
「あ、あの玄龍?あのスピードは……」
「ん?ああ、俺の能力に関係するんだよ。説明するとな……」
～少年説明中～
「つまり、時間を『解いていた』間の反動が来たわけね。」
「あぁ。驚いてたから分からんかったかも知れないが、お前自身も速くなっていたはずだぜ。」
「はぁ…」
　理解したような…してないような。ま、なんか勝ったからいいや。
　すると、魔理沙が奥からやって来た。
「な、なあなあ!!今、高速で移動が出来たんだけど、あれは何だったんだ!?」

「さあ？魔理沙が成長しすぎた結果じゃない？」
「そ、そうなのか？なんか違うような……あ、て言うか、勝手に居なくなるなよな。」
「すまない。」
「仲が良いのね。」
「弟子だからな。」
「…ん？」
などと、緊張のない話をしながら、主である、あの吸血鬼の部屋へと歩むのであった。

第九話　『殺人犯は吸血鬼?』

「お前の手って義手だったのか!?」
「まぁ、色々あってな。」
「面白かったよ。時が止まってて、何がどうなったか分かんないけど、右手にナイフが刺さった状態であのメイドにラッシュを与えた後に、義手直すの大変なんだぞ!!みたいな事言って。」
「ハッハッハッ!!なんじゃそりゃ!!」
　腹を抱えて笑う魔理沙。そんなことを言うが、本当に大変なんだよ。ついこの間直したばかりなのに壊しやがって……
　義手は、隠すために革手袋を着けている。
「にしても、広いよなァ～この館。見た目はそこまでだけどなぁ。」
「それは、俺も感じてた。空間操作系の能力者でも居るんじゃあねえか?」
「どうかしらねぇ。でも、もうほとんどの部屋を調べたわ。」
「最後は……」
　この目の前の部屋。

「部屋……じゃないか。」
「どういう事？」
「窓の位置的に、外に通じてるはずだ。きっと中庭とかだろう。」
「外で戦うわけか……やってやろうぜ!!」
「じゃあ、行こう。ついでに言っとくと、俺って戦闘ヘタクソだから。」
「「え？」」
　ドアを開ける。
　外はもう夜。月は満月で、紅い。近く感じるし、遠くも感じる…そんな月の下に、一人の少女が紅茶らしきモノを飲んでいる。
　高貴な存在。カリスマ性を感じさせるその少女は、こちらを見るとそのまま立ち、スカートの端と端を指先で持ち、ヨーロッパでよくありそうな挨拶をする。
「待っていたわ。退屈だったわよ？私の名は『レミリア・スカーレット』。」
「鬼島玄龍だ。」
「博麗霊夢よ」
「ジョン・スミス」
　魔理沙がふざけ始めたな。俺もふざければよかった。
「ジョ、ジョン・スミス？貴方日本人よね？その前に女性よね？名前が男っぽいけど。」

「あぁ、そうさ。どっちも肯定しよう。」
　ここでボケをかます魔理沙、嫌いじゃあない。便乗でもしようか。
「俺のミドルネームはジョーン。つまり、鬼島・ジョーン・玄龍って訳さ。」
「え、ちょ、ちょっと待ちなさい。混乱しているのに、更に混乱させないで。」
「博麗霊夢はアダ名よ。本名は博師楼麗願霊昌雷同夢想よ。」
「待って…本当に待って!!」
　こいつもボケてきた。ツッコミ役はレミリアだけ。
「いや、もういいわ。貴方達、何のようかしら?」
「宅配でーす。」
「そう、私を倒しに来たのね。」
「無視かよ…」
　中々のスルースキル。もう、諦めたのだろう。
「そういやさ、アレって飲むのか?」
「当たり前じゃない。私は小食でいつも残すけどね。」
「今まで何人の血を吸ってきた?」
「あなたは今まで食べてきたパンの枚数を覚えているの?」
　どこの吸血鬼だよ。

「１３枚。私は和食ですわ。」
「私もそんなところね。」
「奇遇だな。俺も１３枚。」
「いつも何を食ってたのよ。」
　俺は至って普通の食生活だがな。
「麦飯食ってたよ。あとは、漬け物とか味噌汁とかあ、納豆も出されてきたなぁ。」
「出されてきた？犯罪者だったの？」
「そうだな、人の血液を吸うという性癖を持っていたから、殺しちゃった。」
　レミリアが、少し驚いたような顔をしたが、直ぐに元の顔に戻る。

「で、どうするの？もう、私お腹いっぱいだけど……」
「そうだな、私はお腹がすいたぜ。」
「…食べてもいいのよ。」
「ああ、そうかい。今の、植物の名前だぜ。『亜阿相界』。」
「フフ、面白いわ。人間。」
「照れるぜ。」
　空気が変わるのを感じる。そろそろ、戦うのだろう。

「今夜はこんなに月も紅い。」
「まるで、血に塗られたように。」
「分かっているじゃない。鬼島・ジョーン・玄龍。」
「貴様もな。レミリア・スカーレット。」
　二人は見つめ合う。
　紅い瞳をする彼女は何を見ている?人間の皮を被った化物?化物の皮を被った人間?どちらとでも言えるだろう。
　黒い瞳をする彼は何を見ている?自分に似た吸血鬼?自分に似ない吸血鬼?どちらとも言えないだろう。
「「紅く染まる夜になりそうね（だな）」」

第十話　『殺人犯は何者で』

「弱いわねッ!!もっと私を楽しませてちょうだいッ!!」
「クッ!?…ハァ…ハァ…まさか…本当に…弱いなんてね…」
　霊夢は乱れた呼吸を整えながら俺の事を罵倒する。
「だから、最初に言ったじゃねぇかよ。」
「そ…その代わり…私達みたいに…疲れねぇようだな…」
「うん。生まれつきなんか、疲労が溜まらないんだよね～。」
「羨ましい…ぜッ!!」
　レミリアの弾幕を避け続けること、三十分が経過。
　霊夢達は頑張ってレミリアに挑むが、時に連れて動けなくなっている。
　レミリアは、被弾したにも関わらずに弾幕を撃ち続ける。
「フフフ…ちょっと、仕掛けようかしら。」
「…?」
　苦しそうな表情をしながら不思議に思う二人。レミリアの悪い顔。
「食らいなさいッ!!［紅符『スカーレットシュート』］ッ!!」

「ウッ!?ヤバイッ!!」
　俺達の危機。霊夢は一か八か、自分の力に賭けた。
「うおおお!!［霊符『夢想封印』］ッ!!」
「ッ!!……ほう……良いだろう。流石、ここ世界を護ってきた人間だ…」
　互いの弾幕がぶつかり合う。見るに、霊夢が優勢か？
「だがッ!!これだけではこれからの世界は護れないッ!!世界の運命を見ろッ!!世界に回ってきた星を見ろッ!!これらより辛いものを味わうぞッ!!」
　レミリアはスペルカードを中断して、霊夢の弾幕を受け止める。
「ッ!?」
「おいおい、マジかよ…」
「自分を知れ。そして感じろ。全ての運命をッ!!」
　否、掻き消したのだ、あの槍で。
「［神槍『スペア・ザ・グングニル』］……Go to hell（地獄へ行け）.」
　その紅く光輝く槍の先は、俺らの方を向いている。美しい。思わず口に出してしまいそうだった。
「You too（あんたもな）. 俺が連れてってやるよ。」
「なに？愛の告白？」

「だとしたらロマンチック。」
「フッ…やってみろッ!!」
槍が俺達を目掛けて流れてくる。
霊夢や魔理沙は即座に逃げたが、俺はそのまま手をつき出した。
流石のレミリアも首を傾げる。そして…
「速さを『解く』。」
「なッ!?」
それには周囲が驚いた。玄龍の手に触れた瞬間、落ちたのだ。床に。
「いてて…触れただけでも痛いのかよ。力を『解く』。」
紅い妖気が消え、残ったのはただの槍。
「な、何をしたの!?私の妖力を、一瞬で!?」
「私でも時間は掛かるわ…」
「フゥーッ……これでよし。」
玄龍はそのまま持ち上げ、レミリアに向ける。
「いくぜ!!用心しておくことだ…」
「……」
そして、投げた。

だが、明らかに届かない。槍投げの選手でない限り、届かせるのは無理だろう。レミリアは、警戒心を解かない。

「能力を『解く』。」

いきなり、槍は物凄い妖力を放ち、勢いもレミリアが投げた時の二倍。

「ウグッ!?」

かすった。惜しくも当たらず、槍は館の外へと飛んでいった。

「ハァ……ハァ……」

いきなり、汗が大量に出てきた。

不思議な感覚だ。彼は今、殺す気で槍を投げた。しかも、その殺気は今までの人間よりも遥かに強い。きっと、私を集中的に放った殺気であるために、濃く、私しか感じれなかったのだと思う。

「アイツ、いきなり汗をダラダラ出しているぜ。」

「本当ね…」

ご覧の通りだ。やはり、彼は生まれもっての殺人鬼だ。

人を殺すためだけに生まれたのではと、疑問にも思い始めてきた。

「クッ!……ウォラッ!」

急接近し、彼を殴ることにする。

気が収まらない。あろうことか、この私が人間に怖じ気ついているのだから。
「時を『解く』。」
時間停止。ゆっくりと避ける。レミリアの頭を触り、ニヤリと笑う。
「……もう少し待とう。」
三十秒…四十秒…五十秒…一分経過。やっと、玄龍が動いた。
『時間の』能力を『解く』。
時間は進み始める。そして…
「うッ!?」
レミリアは超高速で壁に衝突した。
「カハッ!!……ハァ…ハァ…ハァ…時が加速している?」
「そう言うことだ。」
次第にスピードは普通になり、高速化は終了した。
「死になさい。貴方が迎える運命はそれしかないッ!!」
「と、時の加速化って終わったはずじゃ…?」
「元の速さよ」
スピードが速い。一瞬で玄龍の首元に爪を立てた。
「あまり調子に乗るなよ。」

「あんたが楽しませてって言ったんじゃん。」
「……死ね。最期に言い残したことはあるか？」
「言い残したこと…そうだ、高い壺を買う人に聞きたいんだけど、買って意味あんの？」
「……は？それだけか？」
　やっぱこいつ頭おかしい。
「ああ、そうそう。最後にレミリア君に言いたいことがあるんだけど…」
「なんだ。」
「俺に集中しすぎ。」
「ッ!!」
　レミリアの後ろには、女が二人。
　霊符『夢想封印』
　恋符『マスタースパーク』
「……泣けるわ…」
「あれ、この状態じゃあ俺も巻き込まれるんじゃ……」
　レミリアと玄龍は、弾幕の光に包まれた。

「もう、完敗よ。完敗。」
「レミリアの完敗に乾杯したいわね。」
「ここでダジャレ!?嘘だろ霊夢!!」
「う、嘘だろって言いたいのは俺だぞぉ……」
　完全に俺に気づいていたにも関わらず弾幕を放つという、くそったれ行為に腹が立った。
「ゴメンゴメンゴ☆」
「このッ!!」
「…にしても、傷が治らないわ。このぐらい時間がたってれば、擦り傷はなおっているはずだけど……」
「あぁ、忘れてたよ……能力を『解く』。」
　すると、レミリアの傷が一瞬で治ったした。しかも、さっきより良くなっている。体が軽くなり、今ならもう一回霊夢達と戦えるほどに。
「時を止めてた時、あんたの治癒能力を『解いて』た。吸血鬼だからきっと回復は早いんだろうな～って、勝つ為にね。」

「そこまでじゃないわ。確かに人間よりは早いけど、そこまで変わらないわ。傷が付きにくいってだけ。」
　結果、彼女を助けたこのになったと言うわけか。一瞬で敵の傷を治すという結果。ま、いいか。
「さ、紅い霧を消してくれ。」
「あー…うん。少し時間がかかる。家に帰ってくれたまえ。」
「そう言って消さないかもしれないじゃない。」
　霊夢って意外と疑り深いな。
「んじゃ、俺はここに残るよ。見張りとしてね。」
「え!?」
「なにか困ることでも?」
「……わ、分かったわ。そうしましょう」
「んじゃ、宜しく」
　そう言って、手を前に出す。
「宜しく」
　レミリアも、小さな手で俺の手を握った。

第十一話　『殺人犯は監視役』

「こちらのお部屋です。」
「ありがとう。」
「いえ、客人を丁寧に扱えとお嬢様から言われただけですので。お礼をされるような事ではありません。」
　堅苦しいなぁ。従者は堅苦しいのが基本なのか？だとしたら、金持ちになっても従者は雇えないな、俺は。
「ふぅん……そう。んじゃ、また明日。」
「その前に、お嬢様から伝言です。」
　伝言？なんだろうか。明日のご飯は貴方の血液だから今のうちに自殺してなさい、とかかな？
『朝には紅い霧は消えているわ』…と、仰っておりました。
「へぇ…」
「では、失礼します。」
　深々とお辞儀をし、丁寧に去って行く咲夜さん。ドアを最低限静かに閉めて、多分ド

アの前で礼をしているであろう。俺なら中指を立てる。見習った方がいいな。
「さて……」
一人だ。考え事のしやすい空間。
まず、何故かこの紅魔館の敷地に入ってから、虚無感と絶望感を感じる。俺に似た何かを感じる。
なんだろうか？今まで会った人物一人一人からは感じられなかった。
……まぁ、只の勘だ。きっと気のせいだ。
次に、俺の能力の問題。
奇跡的に生きてるが、能力がなかったら御臨終は間違いない。能力に頼りすぎた。このままじゃ何時か本当に地獄行き。あぁ、霊夢や魔理沙が「ご愁傷様です」と言っている光景が見える。修行だな。魔理沙には修行の練習に付き合ってもらうことになったから、これは良しとしよう。
後は……
等と考えていると「コンコンコンッ」と、音が響いた。
「失礼します。」
「あーい、どうぞー。」
ドアが開いた。そこには、大量の本を持った赤髪で黒い羽が生えている女性がいた。

「失礼します。『小悪魔』と言います。どうぞ宜しくお願いします。」
「……ン？それが、名前なのか？」
「まさかそんなわけないですよ。そんなの異常じゃないですか。名前がないだけです。」
「それはそれで異常だよ。」
一体どういう事だよ。
まぁ、いいや。ここは元々非常識な世界だし。
「んで？何のようさ。そんなに本を持ってきて。」
小「パチュリー様が『暇だろうから』って、何冊か本を持っていくように言われてきました。」
中々、気が利く魔女っ娘だ。素晴らしいね。
「これは私のチョイスですが、この幻想郷に住む能力者について書かれた本などを持ってきました。玄龍様が幻想郷に来たばかりと聞きましたから。」
この娘、出来る娘だ。
「ありがとう。すごく助かる。」
「はい！」
飛び切りの笑顔。思わず、こちらも笑顔になる。笑顔が移ったって感じかな。
咲夜さんもこのぐらい軽くしていけばいいのになぁ。

「失礼しました。」
「ほーい。」
ガチャンとドアが閉まる音。さてさて、持ってきてくれた本でも読むか。
著者は…『稗田阿求』か。

「ふう、面白かった。素晴らしいね。この稗田阿求って人。」
本を閉じ、なんとなく窓を見た。紅い霧は無かった。そして太陽がちらりと見える。
「俺としたことが、夜更かしをしてしまうとは……」
手に持つ本の著者紹介を見る。
「稗田阿求、ねぇ…」
俺はそう呟き、部屋のドアを開けた。

第十二話　『殺人犯は臆病で』

「おはよう。」
　食卓にはレミリアとパチュリー以外の人が揃っていた。
「おはようございます。」
「おはよ！」
「ちょっと美鈴!!敬語で喋りなさい。」
「あぁ、良いんだよ。俺が止めるように言ったんだ。」
「え？い、いやでも……仕事ですし、やはりお客人には丁寧でいないと。」
　やはり堅い。こう言うの好きじゃあないんだよ。殺人鬼が…こう……丁寧に扱われるって異常じゃん。
　だからあまり好かない。
「私達メイドは、お嬢様やそのお客人の命令を聞いて、丁寧に接する事が仕事なのです。」
「それじゃあ、その客人の命令で敬語を止めるように言った。ほら、筋が通っている。」
「……」
「怒ったら握り拳を強く握る癖があるね。こんなムカつく奴に敬語なんて馬鹿馬鹿しい

だろ？」
「まぁ、いいんじゃない？咲夜さんの生き甲斐がこの仕事だから。」
「フゥン…そう。まぁ、好きにしてくれ。」
　そういや、他の人がいないな。
「他のみんなは？」
「あーえぇっと、レミリアお嬢様は博麗神社に行かれてるわ。」
「一人でか？」
「まぁ、そうね。霧を消した報告に行くとか。」
「見りゃわかるだろ。」
「そうなんだけどねぇ。」
　律儀な奴だな。まぁ、俺の知ったこっちゃねぇや。
　ここで一つ、館の異変に気付く。
「さっきから、微少な地震が起きているな。」
「え？あ、本当ですね…。」
「……まさか。」
「ン？『まさか』とは？なにか心当たりがあるのか？」
「…いや、なんでもないわ。」

これは何かある。絶対何かある。

美鈴の下手な嘘を見れば誰でもわかる。咲夜は相変わらずの真顔だが。

「……ちょっとトイレに行ってくる。」

「そう、右を奥よ。」

「サンキュー。」

そういって扉を開けた。

まぁ、ちょっと見ていくだけだからな。震源は……地下かな？

地下に通じる階段を探そう。

と、思ったら行き止まりだ。

あいつ、俺が地下に行くのを防ぐために行き止まりのトイレを差したな。

だが、どうってことはない。トイレと言うことは下水道に行ける場所があるはず。

えぇっと、あったあった。鍵など俺には効かぬ。

「鍵を『解く』。」

カチッという音が、トイレの中に響いた。

「んじゃあ、出発だな。」

下水道を降りると、更に下に続く扉があった。こんな近くにあるもんなんだな。偶然。

扉を開けて階段を降りてみると……
「廊下？多分、地下のだな。妖精メイドが慌てるように飛んでいる。」
何を慌てているのか。
そのまま、廊下に出て奥に進んでみると、妖精達は俺に気付き攻撃してくる。
「ウオッ!?あぶねぇな……ここは、１００ｍ先までの距離を『解く』。」
景色は変わっていないが、妖精達の位置が変わった。俺は一歩前に進み、指を鳴らす。
「能力を『解く』。」
反動で多分１５０ｍは進んだはず。すると、目の前にパチュリーがいた。
「な、なんであんたがいるのよ!?」
「どうも野次馬です。」
「あぁ、あんたと言い、あの娘と言い今日は厄日だわ！」
「残念ながら俺はあんたと戦いたくてここに来ているんじゃあないんだ。さようなら。」
俺はまた距離を『解いて』、一歩進む。能力を『解き』、パチュリーは見えなくなった。
戦いは避けたい。下手くそだから。
しばらく進むと、一人の影が奥に見えてきた。子供か？背丈は小さい。その少女もこちらに気付き、こちらを見つめる。
「おまたせ」

「誰だ？」
「人に名前を聞くときは…」
「あぁ、俺？俺はジョン・スミス」
「『フランドール・スカーレット』よ。鬼島・ジョーン・玄龍さん」
流石に分かるわよ。と、言わんばかりの呆れ顔をしている。ま、それも間違っているけどな。
「フランドル地方のご出身？」
「違うわ。」
「ああそうかい。」
「植物の名前なんでしょ？」
「……」
くそ、レミリアの奴め。こやつに教えやがったな。
「私はここにずっといるわ。貴方がここに泊まっている時も。」
「いたか？」
覚えがない。
「４９５年間。ずっと地下でおねんねしてたわ。」
「ああそうかい。」

「その事だけど、お姉様から聞いていたの。」
「…お姉様ね。」
　アイツに妹がいるとは、知らなかった。まぁ、知ろうともしてなかったしな。知ったところで…って感じだな。
「一度でも人間を見てみたかったわ。」
「咲夜は？」
「人間なの？」
「人間なの。」
　咲夜よ。妖怪と間違われているぞ。可哀想に。帰ったら慰めてあげよう。
「遊んでくれる？」
「すまない、ゲーム機は家にあるんだ」
「弾幕で。」
「何を賭ける？」
「コインいっこ。」
「んじゃ、俺は命」
「コンテニューは出来ないのよ？」
　ゲーム感覚ってか？全く、教育がなっておらん。人殺しをゲーム感覚でなんて。俺は

ゲーム感覚じゃない。食事感覚だったからな。

だが、戦闘が始まってしまった。避けなければならない戦闘を。ま、しゃーなしだな。

思う存分あばれる君。

第十三話　『殺人犯と笑顔と恐怖』

ただいま、絶賛ピンチ中である。

これ程の力量とは恐れ入った。南無三、やっぱり来なければよかった。

しかしそんな遅い後悔もしてられない。高速の弾幕が大量に襲いかかってくる。

「フフフ……」

「フフフじゃあねぇよ!!こえーよ!!危なッ!?」

仕方無い。ここは逃げるしかない!!

「きゅっとしてドカーン!!」

「おい、マジかよ!?」

彼女が右手を握った瞬間、天井が崩れてドアが瓦礫に隠れてしまった。こんな絶望的状況、泣けるぜ。

とは言え、更々死ぬ気は無い。殺人鬼だって人間だもの、死にたくない。

「時を『解く』。」

どうも、『時を解ける少年』です。

停止したモノクロの世界をゆっくりと移動して、物の陰に隠れる。バレなきゃ良いの

だが…

「能力を『解く』。」

そして、反動で世界は加速する。ちなみに、時間の加速を感じられるのは俺から半径１００ｍ以内。彼女は確実に影響を受けるためバレたら一巻の終わりである。

「あ、あれ？身動きが速くなった…？ていうか、彼はどこ…？」

お願いだから気付かないでくれ。

これだけ破壊したんだ。きっと美鈴達が助けてくれるはずだ。

「んー、まぁ、めんどくさいから適当に壊しちゃえ☆」

それは困る！非常に困る！どうすればいい！？

「エイッ!!」

響く爆発音。なんだこの恐怖心は…背筋に寒気が走る。

純粋な殺意が伝わってくる。まるで無邪気な子供…否、もうそれだ。

「む～!!私は弾幕ゴッコがしたいの!!隠れん坊じゃないー!!」

俺はそんなつもりじゃないー!!

にしても、彼女の人格がコロコロ変わる。時に少女。時に淑女。時に悪女。時に……限り無く怖い。いつバレるか……

「ドカーン!!」

「んなッ!?」
俺が隠れていた捲れあがった床が破壊された。その際に驚き、声を出してしまった。
「逃げなければ……ッ!?」
それはもう出来ない。もう無理だ。
少女が目の前にいるのだから。
「みーつけた♪」
彼女は笑顔だった。それは、あどけない笑顔であり、悪魔の笑顔だ。
あぁ、可愛げな笑顔をしている。故に恐怖である。死への恐怖じゃない、彼女への恐怖だ。
「うふふ……」
彼女は俺の首を鷲掴みし、そのまま空中に浮遊した。
つまり、俺は首が絞まっている。
絞殺される前に何かを……しなければ……
「は……な…せ……」
「イヤよ。離したら、逃げてっちゃうもの。みんなみんな、私を怖がってね。」
恐怖と共感。同時に感じる不思議な感覚。
だが、そんな感情は薄れていった。そう、恐怖さえも。首が絞められている所為で頭

に血が上らない。血の気を感じれないのだ。
血を感じたい
ヤバイ、久しぶりに出てしまう。
抑えなければ。いや、抑える必要があるか？この危機的状況、抑える必要性を感じない。血も気も感じない。身体を感じない。空気を感じない。
血を感じたい　血を感じたい
ちをかんじたい　ちをかんじたい
チヲカンジタイ　チヲカンジタイ
ならば、血を飲もう
刹那、彼女の腕が折れた。玄龍のただの拳で。
「なッ!?」
痛みで離してしまった。これで、彼は暴走する。折れた腕を持ってフランを床に投げつける。
力はほぼ人間じゃあない。化物だった。理性を失った化物。玄龍は、玄龍ではなくなっていた。
「な、なにが……」
「逃げんなよ？」

「ッ!?」
　床に叩きつけられたフランに、踵落とし。血ヘドを出すが知ったことか。今は逃げることだけを考える。立場の逆転。
「……おい。」
「ひっ!?」
「血を感じたい……だから……」
俺の餌になれ
　須臾、彼女の首元に傷が出来た。血が垂れる。玄龍は彼女の肩を掴み、そのまま……首にある傷を吸った。
「あっ……」
「……」
　何故だろう。彼女の中で瞬間的に恐怖が消え失せた。恐怖とは裏腹に快感を感じる。気持ちいい……彼女はもっと吸ってほしかった。そのまま無意識に玄龍に抱き付く。
　玄龍も、やめなかった。
「んっ……」
　その時、瓦礫が破壊された。煙が立つ。その煙から、幾つかの影。
「フラン!!…これはッ!?」

「妹様!」
咲夜はナイフをあの男に投げようと、ナイフを取り出すが…無理だった。
恐怖、フラン自身が咲夜に殺気を放っていた。
「……え? ハッ!!ヤバイ、やってしまった……」
フランはそのまま気絶。そこにレミリアが歩み寄る。咲夜はナイフを取り出す。
「妹様に何をした。」
「…血を吸った。」
「…ッ!」
咲夜がナイフを降り下ろすが……止められた。それは、レミリアによって。
「お、お嬢様!?」
「彼は貴女じゃ殺せないわよ、咲夜。彼はもう人間じゃあない。」
「……すまない。確かに、もう人間じゃあないのかもな…責任はとるよ。」
「玄龍。私は貴方の心配をしているの。フランは大丈夫。」
「え?」
その言葉は不思議だった。普通、心配するのは妹へ。俺の心配は無い。
それが普通なのだ。そうなのだが…
「お嬢様!?彼を心配する必要性がどこにあるって言うんですか!?」

「黙りなさい。」
「ッ!!」
「貴方は、フランの血を吸ったのよね。」
「あ、あぁ……」
なんなんだろう。だからこそ、妹を心配すべきではないのだろうか。
レミリア「自分の歯を触ってみなさい。」
言われる通り、歯を触った。すると、奇妙なことがわかった。
「これは……牙?」
犬歯が鋭く尖っていたのだ。まるで……そう、吸血鬼。
「貴方は吸血鬼になったのよ。フランの血…基、ＤＮＡを体に取り込んだ為ね。」
それは、人生の中で一番残酷な言葉だった。

第十四話　『殺人犯は人外で』

「……は？」

弱々しく発した。疑問と絶望、そして哀しみの声だった。

レミリアは同情するように目を閉じ、彼の肩に手を乗せた。それが、玄龍を更に絶望させる。

この男は、トコトン運がない。輪廻転生でこんな性を持ち、周りからは邪険に扱われ、現実を照らす灯台も消え失せた。そんな闇の中で、追い討ちをかけるように襲う現実。俺なんかでも人間だと誇れたのに、今となってはもう遅い。

彼は『吸血鬼』となったのだ

しかし、そんな悲劇のヒーローぶるのもまた違う。どんな理由でさえ、彼は殺人犯。勿論、その場に居る者達も、数多の人を殺し、食べてきた。咲夜は人間で、玄龍のような性を持っていないが、殺してきてはいる。

そう、この場に居る者たちは、心の囚われから逃れる身である。その為に抗っている。にも関わらず、抗っている根元の『人間である』ことが無くなってしまった。

玄龍はもう、廃人になるか修羅へと進むこと、どちらかしか考えられなくなる。

「悪いが、一応君にも責任はあるんだよ。玄龍。」
「……」
「責任を背負うか？逃れるために死ぬか？」
「お嬢様!?いくらなんでもそれは…」
　先程の態度とは打って変わって非情な言葉をかけるレミリアに美鈴は言葉を飲み込むことが出来なかった。
「……少し、一人にしてくれ。」
　レミリアは俯き、咲夜にフランを運ぶように指示する。そのまま、部屋を去っていった。
「……」
　よく見れば、床には血が広がっている。誰の血だろう。もう、分からない。
　そして……
誰もいなくなった

「はぁ!?なによそれ!?」
「……」
「そ、そりゃねぇぜ!?アイツは、私と弾幕ごっこの練習を申し込んできたんだぜ?」
　霊夢と魔理沙は今の話を素直に受け入れることが出来なかった。当たり前だ、一緒に戦った男がいなくなってしまったのだから
「でも、そういうことになったのね?玄龍は……『死んだ』のね?」
　紫の言葉にレミリアは頷き、今にも泣きそうな声で喋り続ける。
「あの時は、冷たくしすぎたのかも知れない」
「いいえ、貴女の言葉なんて耳には入っていなかったはずです」
「何故?何故そう言えるの?」
　紫は扇子を閉じ、目を閉じた。
「彼のような人間は、最早何もない。音も光も感じる力も。」
「……」
「しかも、彼は『廃人』として死んではない。『修羅』として死んだわ」
「……どういうこと?」
「良かったわね魔理沙、彼の練習が出来て。」

「……？」

「なんでだ!!四季さんよ!!閻魔なら確り判断しろよ!!」
「いえ、ちゃんとした結果です。」
「何でだよ!?俺は『クロ』だ!!地獄行きなはずだ!!」
閻魔である『四季映姫・ヤマザナドゥ』による判決は『シロ』、つまり天国行きである。
死神の『小野塚小町』も驚いていた。
「貴方の性は私達閻魔の手違いが引き起こしがものなのです。よって、貴方は『シロ』です。」
「テメェ、頭のネジどっかに行ってんじゃあねぇのか!?」
「来世では、その性は無くなりますよ。」
「聞いてんのか!?チッ、キリねぇよ……」
頭を掻き、後ろをチラッと見た。そう言えば、熱気が伝わってくる。穴が空いている。
もしや、あれは地獄へと続いているのではないか？

「おい死神、地獄には灼熱地獄ってのはあるのか？」
「え？あ、あるけど？」
「だったら、アバヨ。」
玄龍はそのまま穴の中へと飛び込んでいった。その行動にその場にいた者は驚いた。特に閻魔。
しかしそれは……
「ええ!?そこって……」
「旧地獄……」

旧地獄にて、彼女は今日も死体集めをしていた。そう、彼女の名前は『火焔猫燐』。
「うにゃ～、死体が沢山だね!!」
趣味が死体集めという、なんとも女の子らしい趣味だ。うん、ほんとね。
しかし、実は少し飽きてきていたのだ。いつも似た様な死体があるだけで、最近は刺激を求めてきた。

「あ～あ、空から面白い死体でも降ってくれないかな～。」
　そう思っていた矢先、何かが落ちたような音が遠くからした。音の響き的に結構大きい筈。死体か？面白い死体をよろしく。
「ン～あっちからだ。」
　ゆっくり近付いてみる。すると……
「イテテテ……あれ、俺って死んだ筈なのになんで痛みを……そうか、思い出した。地獄の痛みを知るために、感覚神経が通っているんだ。」
「……」
「…ン？どうかしたかい、そんなに口を開けて。顎外れないか、それ。もう外れてる？」
　驚いた。私達は彼が鬼島玄龍というおかしな殺人犯であることは知っている。
　殺人鬼で吸血鬼で幽霊で救世主である、玄龍だ。しかし、彼女はすっかり死体だと思ってた。というか、現在進行形で思っている。
「しゃ……」
「しゃ？」
「しゃべったアァァァァァッ!?」
「当たり前だろ。」
　そうして、玄龍の人生は続くのであった。

太陽の満ちるその時まで
第十五話？『殺人犯はゾンビじゃない』

あれから、どれだけの季節が過ぎただろうか？代わり映えしない地底では時の流れを忘れてしまう。

お燐に拾われ、彼女の雇い主である『古明地さとり』の住まう地霊殿にて仕事を担うこととなった。代わりに衣食住の提供だ。

今日も俺は旧地獄にて、床掃除をしていた。

「玄龍～先に帰ってるからね～。」

「分かった、今行く。」

お燐は怨霊の管理、俺は旧地獄の床掃除をし、それを維持。そして今日の仕事を果たす。充実している、とても。今思えば、天国に行かなくて良かったと、安堵の吐息すら出てくる。

地霊殿に戻り、旧地獄の暑さによって溢れ出る汗を入り口に置いてあったタオルで拭う。もう死んでいるのに体温調節は必要なのかと甚だ疑問なのだが、まぁ、魂の神秘と言うことで。

「戻ったぜ。」
「あら、おかえりなさい。汗もヒドいでしょうし温泉に入っておいてくださいね。」
「分かった。」
読んでた本を閉じ、「おかえり」と、迎えてくれたのが、この地霊殿当主のさとりだ。彼女は人の心を読むことが出来、勿論能力を使わない限り俺の心も読める。
例えば……
「あ、そうですか。今日は和食にしましょう。」
「流石さとり、俺の気持ちがわかるぜ。」
「ただの能力ですよ。」
こんな風に。
本人曰く、この能力は酷く他者から嫌われ、その多くは邪険に扱われたようだ。自分の考えていること、善意も悪意も、誰にも言えない秘密も、全て伝わってしまうから、当たり前と言えば当たり前だろう。
だから彼女はここにいる。
この地霊殿は、幻想郷の地下…いや、地底に存在する。地底は、言わば嫌われ者の居場所。訳あって嫌われることとなった者の溜まり場なのだ。だから、とても居心地が良い。他者が他者の汚点を認め合い、生きていく理想郷。Ｓｈａｎｇｒｉ―ｌａなわけ

だ。
「そう思って頂けると光栄です。」
「おっと、つい居心地が良くて思ってしまった。いや、恥ずかしいぜ。さっさと風呂に入って洗い流そう。」
　笑顔が絶えないなんて経験、生まれて初めてなんだから。そう思ったってしょうがない。
「あ、そういえばお燐は一緒ではないのですね。」
「先に帰ってるはずだけど…？」
「そうですか…最近なんだかお燐から避けられている気がして…最近見かけないんですよね。」
　お燐がさとりを…？にわかには信じ難い。
「気の所為じゃないか？」
「そうですかね…あ、すみません、引き止めてしまって。ごゆっくり。」
　さとりはまた本に視線を落とした。

疲労が溶けた溜め息を吐きながら、俺の体を湯に浸す。ここの仕事にも慣れ、友好関係が日々広がり、深まっていくのを身に染みて感じる。

「玄龍ー、背中流す?」

「ありがとう、気持ちだけで大丈夫だ。」

この男湯に入ってこようとするアホの子は『霊烏路　空』と言い、皆からはお空と呼ばれている。旧地獄の温度調節をになっている烏の妖怪だ。俺も詳しくは分からないが、地獄烏っていう妖怪らしい。まんまやん。

ここで勘のいい人は気づいているかもしれないが、この地霊殿には動物、若しくは動物系の妖怪が多い。理由は、さとりの心を読み取る能力が、動物達とのコミュニケーションとして使えるためであるらしい。

それは置いといて、最近、お空は賢くなった。

今の光景を見て、皆さんはさぞ「こいつは何を言ってんだ?」とお思いになってるだろう。だが、前は酷かった。まず、「背中流す?」などと訊いてこなかった。なんの前触れもなく、真っ裸で入ってきやがるのだ。

それだけなら嬉し…違う、それだけならまだしも、その後、心を読めるさとりからは

白い目で見られるのだ。俺は何も悪くない。多分。
「ねー玄龍。」
「なんだ？」
「もし、私が強くなったらどう思う？」
「いきなりどうしたんだ？」
脱衣所越しに突拍子もなくそんな事を訊いてくる。
どう思う？というなんとも言えない曖昧な質問は、非常に悩ましい。別に、お空が期待している答えを探している訳では無いが、正直どうでもいいというのが答えだからだ。質問に対して、無責任だと考えてしまう。というよりも、過去に自分がそのように回答された時、そう感じたからだ。
それでは、どうするべきだ？
「玄龍は、最近お燐から聞いたんだけど氷結の魔法を習得したんだったよね？それは強くなるため？」
「いや、旧地獄が暑すぎるから涼むためだけど。」
「そうなんだ…」
どうしたのだろうか。お空はいつも元気が有り余っている。らしくない。
「まぁ、強くなろうとしてるのならそれでいいと思うが…強さを間違った方向に使わな

いことだな。」
「間違った方向?」
　俺がこれを言うのか。どんな笑い話だよ。
「月並みなこと言うけど、人を傷つける為じゃなく護るために使う、みたいな?」
「そっか…そうだよね。」
　納得したような言葉だが、どこか不満気な声色だ。どうやら求めていた答えとは違ったらしい。
　まぁ、彼女はお燐にも「鳥頭」と揶揄される程に記憶力がない。この質問の真意は知らないが、そう深く考える必要は無いだろう。
「そろそろあがるから、脱衣所から出て行ってくれるか?」
「なんで?」
「裸を見られたくないから。」
「そっか。それじゃあ、またね。」
　引き戸が閉まる音が脱衣所から聞こえる。俺は温泉から出て、脱衣所に向かいながら軽いストレッチを行う。

次の日、お空の姿が見当たらなかった。

まぁ、良くあることだ。お燐が死体集めを趣味とするように、元々地獄鳥は地獄の罪人の肉や皮を食らっていたらしい。その為、癖でよく旧地獄の方に足を向かわせることが多い。今日もそんな理由で不在なのだろう。

「今日は日曜だから、仕事はお休みだね。」

隣で朝ご飯を食べているお燐が嬉しそうに話しかけてきた。

「でも、死体集めのために結局旧地獄に行くんだろ？最近マグマの熱が謎に上がりやすいし、それも見に行くか？」

「ふふふーん。」

「…なんだその笑みは？」

いかにも何か企みがあるような様子に、思わず苦笑いをしてしまう。コイツが何か企んでいる時は大体俺が巻き込まれる。今回は、何に巻き込まれるんだ。

「気になる？」

「気にならん。」
「気になれ。」
　面倒だな。
「じゃあ気になるよ。教えてくれ。」
「へぇ?気になるんだぁ!?」
「やっぱいいや。」
「ごめんなさい聞いてくださいお願いします。」
　ここまで来ると面白いな。
「それで?どうしたんだ?」
「いやぁ…そのね?なんて言うか…」
　何を言い淀んでいるんだ。自分のおさげを細い指で弄りながらモゴモゴと口ごもっていく。話を聞いて欲しいのか聞いて欲しくないのか、ハッキリしてくれ。
「その…今日さ、一緒にお出かけしない?」
「…なにを企んでるんだ?」
「何も無いわよ!私をなんだと思ってるのさ!」
　にわかには信じ難いが…本当にただ出かけるだけなのか?それに、なぜ俺が付き添わないとならないんだ?いや、行きたくない訳では無いが、他にも誘える人は居ただろう

に。
「その疑心の眼差しやめて。行くの？行かないの？」
「別にいいけど…」
「ほんと？」
「うん。」
承諾すると小さくガッツポーズをした。なんだか、やっぱり何か企んでるんじゃ…じゃなかったら荷物持ちに使われるのか？有り得るな。
とはいえ、折角の休日だ。ショッピングや誰かと食事に出かけるのも悪くは無い。
「それじゃあ、早速出かけよう！」
「まず飯を食え。」
「あ、はい。」
忙しないな。

第十六話　『殺人犯は荷物持ち』

　地霊殿の正門に凭り掛かり、出かける準備をするお燐を待っていた。朝ご飯を食べてた時には既に私服になっていたというのに、何を準備しているのやら。
「ごめん、待った？」
　やっと来た。声のした方向へ顔を振り向かせる。すると、先程とは違いチャイナ服っぽい黒く、所々に赤い花の刺繍が入ったワンピースに着替えているお燐の姿があった。
「いや、まぁ、気にするほど待ってないけど…なんで着替えた？」
「なんでって…まぁ、お出かけだし？」
　そんなもんなのか。
　それにしても、見たところ服だけじゃないな。化粧などもしているようだ。
「なんか、お燐が化粧してるの新鮮だな。」
「何よ、似合わないとでも言いたいわけ？」
「いや、似合ってる。」
「…そっか。ありがと。」
　どこかよそよそしい。まぁ、おめかししていない普段の自分を知られてるから、化粧

をした自分を見られるのは恥ずかしいのかもな。
「それじゃ、行こ?」
「そうだな。」
そうして、俺は珍しく1人ではなくお燐と一緒に街へと足を運ばせる。
地底には地霊殿や旧地獄のみではなく、嫌われ者の繁華街が存在する。人口の比率としては8割ぐらいは鬼が住んでおり、食事処や雑貨屋など、多様な店が大通りに沿って整列している。
そういえば、今日はどこに行く予定かは何も聞かせれていない。
「なぁ、どこに行くんだ?」
「そうね…洋服を買いに行こうかな。」
「了解。」
やっぱり、荷物持ちの予感がする。外にいた時も警官の人が「彼女の服選びに付き合わされてて、荷物持ちにされたよ。」と幸せそうに愚痴を言っていたのを覚えている。恋人さえ荷物持ちに使うのだから、友人という関係でもそういう扱いはするだろうな。
お燐の方に目を向ける。まぁ、楽しそうにしてるし、別にいいか。
「ねぇ、玄龍はどんな服が好き?」
「そうだな…ファッションには疎くてな、あまりこれと言って好きなものはないな。」

「ふーん、そうなんだ。」
　今までずっと監視されてるし、外に出ていいと許可が出たのもある程度成長してからだからな。その頃には何がカッコよくて何がダサいかなんて区別は出来なくなっていた。仕方がない。
「お燐はどんな服が好きなんだ？」
「私は、そうね～。かわいい服が好きよ。」
「なんともまぁ、抽象的だな。」
「いいでしょ別に、かわいい服全般好きなのよ。これだってほら、今流行りのワンピース。かわいいでしょ。西洋の服なのよ。」
　それが流行りなのか。なんて言うか、モダンガールだな。
「ねえ、どうなの？かわいい？」
「言っただろ、ファッション分からんから。」
「じゃなくて、その、これを着てる私…」
　なんだこの承認欲求の塊は。
「うん、かわいい。」
「えへへ、そうでしょ。」
　さっき似合ってるって言ったはずなんだけどな。まぁ、彼女が満足したのなら何より

だけど。
「あ、着いたよ。」
「ここか。服なんて買わんから初めて来たな。」
「そうだと思った。ここでこの服を買ったの。」
　地底の繁華街にしては小綺麗な店だ。ワンピースとかが売っている割には和風な建築だが。
「中、入ろ?」
　思考してる俺の手を取り引っ張って、お燐はお店の暖簾を潜った。
「あらぁ、お燐ちゃんいらっしゃい。」
「店長さんこんにちは!」
　中には白いワイシャツに灰緑のスカートを揺らす女性の鬼が服を畳みながら出迎えてくれた。その人はお燐と俺を交互に見ながらニンマリと笑う。
「今日は彼氏さんと来たのねぇ。」
「ち、違います!彼は地霊殿で一緒に働く友人です!」
「うふふ、そうなのねぇ。あ、私はこの店の店長をしてます『妙』と言います。よろしくねぇ。」
「鬼島玄龍です。よろしくお願いします。」

お妙さんはまるで品定めをするようにマジマジと俺の全身を見て、満足するとお燐にその笑顔を向ける。
「お似合いねぇ。」
「も～！だから違うってば…」
なんだか、元いた世界でもこんな世間話は繰り広げられていたように思える。数年幻想郷に住んでて初めて共通する部分を見つけた気がする。いや、同じ人間なんだから当たり前っちゃ当たり前か。
「それで、今日はどういった服を着たいのかしら？」
「あ、そうそう。今日は玄龍の服を選びに来たの。」
「俺の？」
「ふふん、アンタが同じ服をローテーションしてるから、アタイが選んであげる。」
なるほど、そういう企みね。かわいいもんだな。確かに、同じ種類の服を繰り返し来ているから流石に薄汚くなってきた。そろそろ新しいのも買っていいのかもしれないな。
「ありがとうな。折角なら選んでもらおうか。」
「任せて！アタイはセンスがいいからね！」
「頼もしいな。」

恐らくお燐からしたら俺は着せ替え人形なんだろうけど、こっちも利得はあるし、別にいいか。

「いやー、たくさん買ったね！」
「こんなに服を手にしたのは初めてだよ。」
両手に大量紙袋を持ちながら、何も持っていないお燐の隣を歩く。私物だから荷物持ちではないが…なんだか複雑だ。
「感謝しなさいよ。それと、これから定期的に私とデー…かけてもらうから。」
「はいはい、ありがとうございました。」
「全然感謝してないじゃない！」
恩着せがましいな、この猫は。それじゃあ、感謝をする気が削がれるだろ。
「うるさいな、感謝してるって。」
「めんどくさがってるじゃん。」

　よくお分かりで。
「分かった。アンタの紙袋、片方頂戴。持ってあげるわ。」
「え、なんで。」
「アンタがアタイに感謝することを増やす。」
「なんだそれ。いいよ、十分感謝してるよ。ありがとうな。」
「いいから!」
　そう言いながら俺の右手側の紙袋を無理やり奪い取る。なんでコイツはいつも強引なんだ。それに今回は何がしたいのか分からない。コイツ自身も分かってないんじゃないか?
「ふーん、これでアンタはアタイに感謝しまくりなさいよー。」
「どうも、ありがとうございます。お礼に何かしてやるよ。何がいい?」
「え、いいの?」
「常識の範囲内でな。」
　コイツなら何かとんでもないことを要求しかねない。こうでも言わないと碌な目に遭わない。
　お燐は少しソワソワした様子で口をすぼめた。
「それじゃあさ…手、繋いでよ。」

「手？いいけど、そんなんでいいのか？」
「…うん。」
もしかしてコイツ、いや、まさかな。いやでも、流石に俺でもこれはそう思わざるを得ないというか…好きなのか？恋愛経験が皆無な俺だから分からない。異性の手を繋ぎたいと思うのは、恋愛対象だってことなのか？
いや、からかっている可能性もある。俺の経験が少ないことを笑おうとしているかもしれない。
試すか…？俺はお燐の左手をそっと握る。
「これでいいか？」
「うん、ありがと。」
「…」
特に反応は変わらない。というより頬を赤らめているようにも見える。これはもしかして…やっぱりそういうことなのか？
「なぁ、お燐。」
「…何？」
お燐が赤い瞳でこちらを見つめる。目が若干泳いでおり、握った手に力が加わっているのがわかる。そのおかげで血液が激しく流れているのも感じる。

「お前、俺の…」

その言葉を言おうとしたその時、地底の入口方面から大きな爆発音が聞こえた。それに弾幕の音も。誰かが喧嘩でもしているのか？それにしては激しすぎる。しかも、段々と俺たちの方、もとい地霊殿の方へと迫ってきているようだ。

それに、なんだか聞いたことのある音だ。この音はまさか…

「玄龍、とりあえず地霊殿に戻ってさとり様を守ろう！」

「え、あぁ、そうだな。」

俺とお燐は駆け足で地霊殿へと向かっていった。

第十七話　『殺人犯は再会を』

地霊殿までたどり着くとさとりが慌てた様子で俺らに話しかけてくる。
「玄龍さん！お燐！旧地獄に今までにない程温度が上昇してます！」
「旧地獄…？お空はどうしたんだ。」
「分かりません…恐らくあの子の管理下のことですから自分から調査をしに行っているかもしれません。それと、今繁華街に住んでる方から、博麗の巫女と魔法使いがこちらに向かってきているようです！」
「やっぱりか…」
あの弾幕の音、聞き覚えがあると思ったら魔理沙のマスタースパークだったんだ。それにしても、アイツらが向かってきているということは異変解決が目的だろう。でも、何を異変だとみなしたんだ？旧地獄の高熱は今日の朝から今まで、つまり正午までの間に発生した。行動が早過ぎないか？
もしかして、以前からマグマの熱が上がりやすくなっているのに関係しているのか？
「とりあえず、俺は旧地獄の方に向かう。さとりとお燐は博麗の巫女たちに目的を聞いてくれ。無闇矢鱈に攻撃をする奴らじゃないはずだ。」

「分かりました。」
「了解！」
　その言葉を聴き、俺は旧地獄の方へと急いで向かう。目的地に近付けば近付く程、熱気はどんどんと濃度を増していく。今までにないほどに汗が至る所から吹き出し、そしてその入口までたどり着く。
　扉を開くとそこには――――
「お空…か？」
「こんにちは、玄龍。」
　まるで太陽のような赤く燃える球体を後ろに構えたお空の姿があった。彼女はいつものように無邪気にニッコリと笑っており、褒めてくれるのを待っている子どものようだった。
　お空が原因だったとは…気を抜いたな。
「…どうしてこのようなことをしているんだ？」
「私はね、神の力を手に入れたの。八咫烏様の太陽の力を。」
「八咫烏…」
　八咫烏は日本書記や古事記にも出ているが、中国の伝説にも太陽の中にいると語られている鳥である。

最近、お空の様子がおかしいとは何となく感じていたが、早く対処しておけばよかった。仕事が増える。
「この力を使って私は地上を征服しようと思ってるの。すごいでしょ。」
「ちなみに、どうして征服しようと?」
「さとり様がみんなに嫌われてるって、悔しいんだもん。こんな窮屈な地獄にしかいられないなんておかしい。なら、地上を灼熱地獄にすればいいんだってね。」
なんともまぁ、極端な考えだこと。お空らしいと言えばお空らしいけど。
「それは、さとりが望んだことか?」
「さとり様は優しいから多くを要求しようとしないのよ。でも、絶対心の奥底では望んでいるはず!」
典型的な歪み方をしているな。さとりの事だから、これを知ったらお空のことを叱るだろうな。ただ、今の状態で叱ると、お空からしたらその人の為に頑張ったのに受け入れられない、つまりは拒絶をされたというように捉えてしまい、さらに暴走をする可能性がある。ならまずは、お空のこの暴走を抑えよう。きっと霊夢たちも来るはずだ。
「そっちに近づいてもいいか?」
「え、でも玄龍が溶けちゃうよ?」
「一瞬だけでも?」

「うーん、分からない。」
「なら試してみようか。」
　俺は吸血鬼の脚力で太陽まで一気にジャンプをする。そして一瞬手を太陽に触れ、俺はあるものを『解いた』。
　暑い。ただ、手に関しては熱いとかの概念ではない。義手だからな。溶けちゃったけど。溶けた金属は危ないため、着地をする前に義手を外しマグマに捨てる。
「え、痛くないの!?」
「まぁな。」
「なんでわざわざそんなことしたの…?」
「太陽がどれだけの力を持ってるか確かめたくてな。」
　それにしても、どうしてお空はこんなに膨大な力を得ているんだ?神の力を手に入れたって言っていたが…どういうことだろうか。落ちてた神様を拾い食いでもしたのだろうか。
　分かるはずもないことを考えていると、旧地獄の入口が爆発音と共に煙を上げた。やっと来たか。とりあえず俺がいたらややこしくなるため近くの岩に身を隠す。
「ゴホッゴホッ…魔理沙!なんでわざわざ扉を破壊するの!」
「いやぁ、この方が登場シーンとしてカッコイイだろ?」

異変解決に来てると言うのに、相も変わらず能天気な二人がその煙から現れた。何やら霊夢の周りには変な陰陽玉、魔理沙の周りには人形が浮いている。
「あ、貴方たちね。わざわざどうもご足労頂いて…」
お空は恐らくどういった意味なのか分かっていないで言っているだろうが…霊夢達も何故がお辞儀をしてる。
「お前か？地上に吹き出た間欠泉の原因は。」
間欠泉…？旧地獄の温泉が吹き出たってことか？それは別にいいんじゃないか？何が異変なんだ？
「間欠泉…そうね。それがどうかしたの？」
「あれを止めて欲しいんだとよ。危ないから。」
「……間欠泉はそんなに危険ではない筈。せいぜい火傷する程度じゃない？」
『お湯と一緒に何かが湧いてきてるの！怨霊か何かが。』
魔理沙の周りに浮いている人形から女性の音声が発せられる。
怨霊が湧いてくるって…怨霊の管理はお燐の仕事のはずだ。間欠泉と何か関係があるのか？
「怨霊……？怨霊ならお燐が管理している筈……怨霊の件は私じゃない。それに、もう間欠泉は止められないのよ。」

「何だと？」
「私が余りに強い力を手にしてしまったから、火焔地獄の炎は強くなる一方。それに伴い間欠泉も強くなるわ。」
「強い力だと？」
「ええ、究極の力。地上を全て溶かし尽くす最後のエネルギー。」
　お空がその言葉発したと同時に太陽は膨張した。更なる熱気を帯び、旧地獄は本来の姿を取り戻したかのようだった。
「とりあえず、コイツ倒せばいいんでしょ？」
　霊夢はこの熱気に対し、暑そうにはしているが余裕の表情を見せる。魔理沙も同様に余裕の笑みを浮かべている。
　本当に、アイツら俺と同じ人間かよ。俺はこのままでは溶けてしまいそうなため地霊殿の入口まで移動する。汗をかきすぎた。水分を取らないと。
「究極の核融合で身も心も幽霊も妖精もフュージョンし尽くすがいい！」
　末恐ろしいことを言っているが、ここは彼女らに任せることにしよう。俺はもう、準備が整った。今はただその戦いを遠くから見ているだけでいい。というか休ませてくれ。

第十八話　『殺人犯は傍観者』

旧地獄の方ではお空と2人の弾幕が色鮮やかに咲いていた。弾幕なんていつぶりに見ただろうな。

俺は近くに置いてあるタオルで顔や体の汗を拭う。ここもまだ暑い。氷結魔法を俺の周囲に放とうとするが、そういや今は魔力がない。さっき使ったからだ。

「あー…あちー。」

倒れるように仰向けになり、地霊殿の天井を見つめる。

霊夢と魔理沙はあの時から変わっていなかった。紅魔館でレミリアと戦った時のように、一方は気だるそうに、一方は楽しそうに、異変に挑んでいた。

久々に話したい。が、霊夢はともかく、俺は魔理沙との約束を破ったからな。俺から弾幕の練習を持ちかけたというのに…

「水飲むか。」

頑張って足を使って立とうとするが、どうも覚束無い。それに視界がぼやける。脱水症かもな。そんな呑気なことを考えながら、体の力が抜けていく。

「玄龍!」

「…お燐か。ナイスタイミングだ。」
お燐が俺の身体を支える。どうやら戻ってきたようだ。なんだかボロボロになっているように見えるが…なんで？
「水、くれるか？」
「もう用意してるよ。」
「サンキュー…」
コップに入った水をもらい、一瞬で飲み干す。冷たくて美味しい。生き返るような気分だ。霊体だけど、俺。
「お空の様子…どうだった。」
「なんだか神の力を手に入れたらしいぞ。それで地上を征服するってさ。」
「そっか…」
「それより、お前に聞きたいことがある。」
そういうと、お燐は右耳をピクッと動かす。何を聞かれるか、大体予想がついているのだろう。
「なんでお空の様子を聞いてきた？お空が異変の正体だなんて誰も知らなかったはずだ。俺もついさっき知った。」
「それは…」

「それに、最近さとりを避けていたそうだな。何か読まれたくない思考でもあったのか？」
「…あ、あはは。玄龍は鋭いね。」
お燐は苦笑いを浮かべる。反応から見るに、さとりにもついさっき怒られたのだろうな。
「なんで怨霊を地上に送った？」
「その…お空が最近様子が変だったから、調べたら地上を征服するって言ってて、さとり様や地底の人に処罰されるのが怖くて、それで…」
「地上に助けを求めたということか。」
これで霊夢達が異変発生時から時間がかからずに来た理由がハッキリとした。異変発生はもっと前からあったということだ。
「お空はバカだけど…アタイの友達だからさ、失いたくなくて…」
「そうか。」
涙ぐむお燐を見て、なんだか悲しい気持ちになった。なんで悲しいのか。それは恐らく単純だ。俺はお燐の頭に手を乗せる。
「一人で抱えんな。俺もいるだろ。」
「…ごめん。」

彼女の頬に一つ涙が伝う。
「あれだな、これが終わったら俺の義手治すの手伝え。約束な？」
「…うん。」
「よし、じゃあ終わらせに行くわ。」
「え、危険だよ！あの二人に任せておけば…」
「お前が今後一人で抱えないように、頼れるところ見せなくちゃな。」
柄にもなく臭いことを言っている気がする。でも、青春を今取り戻してもいいだろ？

「なぁ、霊夢。」
「なによ。」
「消耗戦だぜ、こりゃ。このままじゃあ暑さに体力を削られる。」
そんなことはわかっている。だが、目の前のお空とかいう烏が意外と体力があり、加えて弾幕の密度が濃い。それだけなら大丈夫なのだが、魔理沙の言うようにフィールド

の環境が悪い。勝ってギリギリだろう。
「紫、隙間の中に水とか用意してないの？」
『そんなものないわよ。頑張って耐えなさい。』
「使えないわね…」
『聞こえてるわよ。』
　周りに浮いている陰陽玉から呆れたような声が聞こえてくる。
　とはいえ、あちらも神の力とやらのエネルギーは大量に使っているはずだ。見た感じあちらもギリギリの戦いに思える。しかし、熱気により劣勢なのは明らかにこちらだ。どうしたものか…。
「冬服なんて来てくるんじゃなかった。」
『それ、冬服だったんだ。』
　どう見ても冬服でしょ。博麗の巫女のユニフォームを知らないなんて、幻想郷の賢者としてどうなのよ。
「呑気にお話なんて余裕ね！」
「あーあ、紫の所為で怒った。」
『雑な責任転嫁はやめて。　』
　弾幕の密度は更に増していき、右も左も弾幕だらけ。常にかすれている。通信の電波

が良くなるからいいけど。
「おい霊夢！笑えなくなってきたぞ！もうボムもない！」
「あっちもこれがラストスパートよ！エネルギーを使い切るようなエネルギーの流れを感じる。」
　太陽も先程に比べ、心做しか小さくなっているように感じる。このまま行けばきっと……！
『霊夢！危ない！』
「え…」
　目の前には一つの弾幕。顔面の目の前にあり、私は体を仰け反ってそれを避ける。危なかった。考え事なんかしている暇はない！
　一切の油断を許さず、何も考えず、私のセンスだけで迫りゆく弾幕を避けていく。数分が経過し、その弾幕地獄から解放される。
「今のを避けるのね…」
「これで終わりよ。あなたに私は倒せない。」
「…いいえ、これで終わりじゃない。残念だったわね、まだ最後の力があるの！」
　そうすると彼女は先程よりも更に濃く速い弾幕を撃ち、流石に私もこればかりは絶望を感じる。こんなに危ない妖怪をこのままにするわけには…！

「能力を『解く』ッ!!」
「え…」
瞬間、太陽は氷に覆われ光を失い、灼熱地獄のマグマは石と化し、熱気から一気に冷気が全身を襲う。
「おまっ、生きていたのか!?玄龍!」
「残念、死んでるよ。」
死んだはずの鬼島玄龍が、私の目の前に立っていた。

第十九話　『殺人犯は容赦しない』

「お前ら、よくここまで耐えてくれたな。おかげで時間を稼ぐことが出来た。」
　死んだはずの玄龍が、凍えて震える程の冷気と共に現れた。
「玄龍？どうして止めるの…？さとり様の為だって言ったでしょ!?」
「そうか、そのさとりはお前に怒っていたぞ。なぁ？霊夢、魔理沙。」
　そう確認するように彼は右側から振り向きながら私たちに話しかけてきた。さとりとの会話では、そんな話をしていない。いや、原因が自身とペットだという話をしていたが、怒っているかどうかは定かではなかった。
　玄龍はニヤリと笑い、何かを口パクで伝えようとしている？
（嘘をつく時は…？）
　そういう事か…。いいわ。付き合ってあげるわ、その嘘に。
「もうカンカンだったわ。怒りながら八つ当たりのように私に弾幕撃ってきてたもん。ねぇ、魔理沙。」
「え、え？お、おう。もう、そりゃ、うん。凄かったぞー」
　嘘下手か。

「そ、そんな…私は、さとり様のために…!!」
お空のエネルギーの流れに乱れが生じる！今だッ!!
「反省してるなら、倒されてちょうだい！霊符『夢想封印』!!」

「私のペットが、本当にご迷惑おかけしました！」
さとりの綺麗な謝罪と、その横でしょんぼりと小さくなりながら腰を曲げているお空。そしてゆっくりと謝罪する怨霊の元凶であるお燐。
「いや、もういいわよ。分かったから。」
「謝罪は宴でしてくれ、そしたら全員許してくれるぜ。」
異変解決後には宴をするのが恒例だ。異変の元凶である者が全て奢ることで丸く収まる。終わりよければすべてよし、といった精神だ。
「そうそう、俺の義手もお燐が直してくれるし、気にすんなよ。」
「お前は許さないぜ、玄龍。」

「え、なんで。」
「そうよ、どうして私たちに連絡しないのよ。無駄に心配したじゃない！」
「霊夢って心配するんだな。」
「あ？」
「って魔理沙が言ってた。」
「おいッ!!」
　相も変わらず、この殺人犯は掴みどころがない。私は魔理沙の胸ぐらを掴みながらも、玄龍に話しかける。
「今までここで働いてたってこと？」
「そうだな。居心地もいいし、のんびり暮らしてたよ。」
「そっか。まぁ、アンタがそれで満足してるならいいんじゃない？」
　一つだけ変わった部分がある。妙に棘のあるような雰囲気だった彼だが、何となく丸くなったような気がする。それもこの地霊殿のおかげか、単純に幻想郷に馴染んできたか。
　魔理沙が手首を苦しそうに叩いてきたため、手の力を緩める。
「ゴホッ…あー、まぁ、これで解決したし、宴会だな！」
「いや、まだだ。」

「おいおい、私との約束を破った上に宴会まで阻害する気か？」
「それはごめんって。そうじゃなくて、この異変がまだ終わっていないってことだよ。」
笑ってふざけていた魔理沙もその言葉に思わず眉を顰める。
「それは、どういうことだ？」
「お空、その力はどうやって手に入れたんだ？」
「え…えーと、分からない。忘れちゃった。」
「あぁ、うん。そうですか…」
玄龍は顎に手を置き、考えているような仕草をする。恐らく、お空は元々このような力がなかった。しかし、突然その力を得て、今回の異変を起こした。
そこには、誰かの作為を感じるのだろう。それは私も同じだ。というより、この神力の特徴はもしかしたら…
「ねぇ、もしかしたら知り合いが原因かもしれない。」
「本当か？」
「霊夢にそんな知り合いいたか？」
「ほら、いるじゃない。最近引っ越してきた新参者の神が。」
そういうと魔理沙は納得するように頷いた。地霊殿組は一様に首を傾げているが。
あの新参者どもはなんでこう厄介なことをしやがるのかしら。

妖怪の山。つい先月も訪れ、暫くは訪れることは無いと思っていたのだけれど、あのバカ三人衆は二度も、それも短期間にやりやがるとは余程制裁を欲しがっているということだ。

「なぁ、ここにお空に力を与えた神がいるのか？」

「いるぜ。アイツらが犯人っていうのも納得できるな。」

玄龍も付き添いできてもらった。本来、地底の妖怪を地上に上がらせるのは幻想郷のバランス上原則禁止なのだが、玄龍は紫が言うには「彼は例外。」との事。元々、彼は紫が直々に幻想郷へ招待した人間。いや、元人間だ。例外というのも、アイツのメンツが立たないからだろうな。

コイツ義手壊れてるから使い物にならないけど。

「そういえば玄龍。お空の暴走を止めた時、お前一体何をしたんだ？お前に太陽を凍らせる程の魔力なんかないだろ。」

確かに、それは少し気になる。あの、戦闘が下手くそで能力頼りの玄龍があんな大層な魔法を扱えるとは思えない。というか、パチュリーでもあんな威力にはならない。何か裏があるはずだ。

「あぁ、そうだな。旧地獄って暑いだろ?だから涼むためだけに練習して軽い氷結魔法は覚えたんだよ。それを太陽の周りで発動し、同時に俺の能力で解いた。俺の能力、覚えてるか?解いた対象に使った能力を解くと反動で大きな力になるって。」

「なるほどね。解いた反動で太陽すら凍る氷結魔法へと変化したわけね。」

「まあ、あれは表面だけ冷えただけどな。あくまで目的はお空のエネルギーの枯渇だったからな。」

「私たち頼りの作戦ってことかよ…まぁ、お前らしいけどさ。」

レミリアと戦った時にも思ったが、彼の戦い方は自分の弱さを認めた上で周りの資源を活用することを前提としたものだ。

なんというか、向こうの世界でもそんな能力があったのに、よく慢心せずに自分が弱いと認識しているな。そう感心してしまう。

「あら?霊夢さんに魔理沙さんじゃありませんか。」

聞き覚えのある声。どうやら探す手間が…と思ったがどうやら1人らしい。

「この寒い中参拝に来たのですか?そこにいらっしゃるのは新しい信者さんですか?私

はこの神社の巫女兼現人神の東風谷早苗です！」
「鬼島玄龍だ。」
「今早苗に用はないんだよ、お前んとこの神に用があるんだ。」
「諏訪子様と神奈子様ですか？神社じゃないですかね。」
　なるほど、アイツらの場所さえ分かればこの自称現人神に用はない。
「あ、待ってください！私もここでの挨拶の仕方を学びました。この幻想郷では常識に囚われてはいけないのですね！」
　そう言って弾幕を出そうとする。お前の常識履き違えてるから。
「玄龍、アイツやって。今相手してあげられるほどの気力ない。」
「え、あぁ。分かった。」
　そういうと玄龍は早苗に真正面から近付く。早苗は流石に動揺して弾幕を引っ込める。
「玄龍さん、危ないですよ。一般の方は横で私の勇姿を観ていただいて…」
「ごめんな、霊夢を恨んでくれ。重力を『解く』。」
「え？きゃあああ!?」
　玄龍は重力を解いた後、早苗の腕を掴み上空に投げる。突然のことに何が何だか分からない早苗だが、すぐに霊力を使ってふよふよと降りてくる。

「ちょっと、何をするんですか!?危ないじゃないですか！」
「能力を『解く』。」
「グヘッ!?」
玄龍が指を鳴らし、同時に早苗が地面に叩き付けられる。なんというか頼んだ私ですら可哀想に思ってきた。
「じゃ、行こうか。」
「あ、うん。」
初対面の人を容赦なく地面に叩きつける玄龍に、改めて狂ってると実感した。